

明治三十三年三月七日
文部省檢定
中學學校歷史教科用書
濟定

文學士桑原隲藏編著

初等東洋史

東京 大日本圖書株式會社

新朝建都地
秦(咸陽)

漢(東)洛陽
漢(西)長安

三國
一漢 咸陽
二魏 洛陽
三蜀 成都

西晉 洛陽

南朝 江寧
南齊 建康

唐 長安

東晉 江寧府

北朝 洛陽

宋 北 汴
南 臨安

上方 洛陽
下方 長安
江蘇 揚州

元 開平 北京

明 金陵 (南京)

清 北京

Zituzô
(1870-1931)

220 Ku 966 (7)

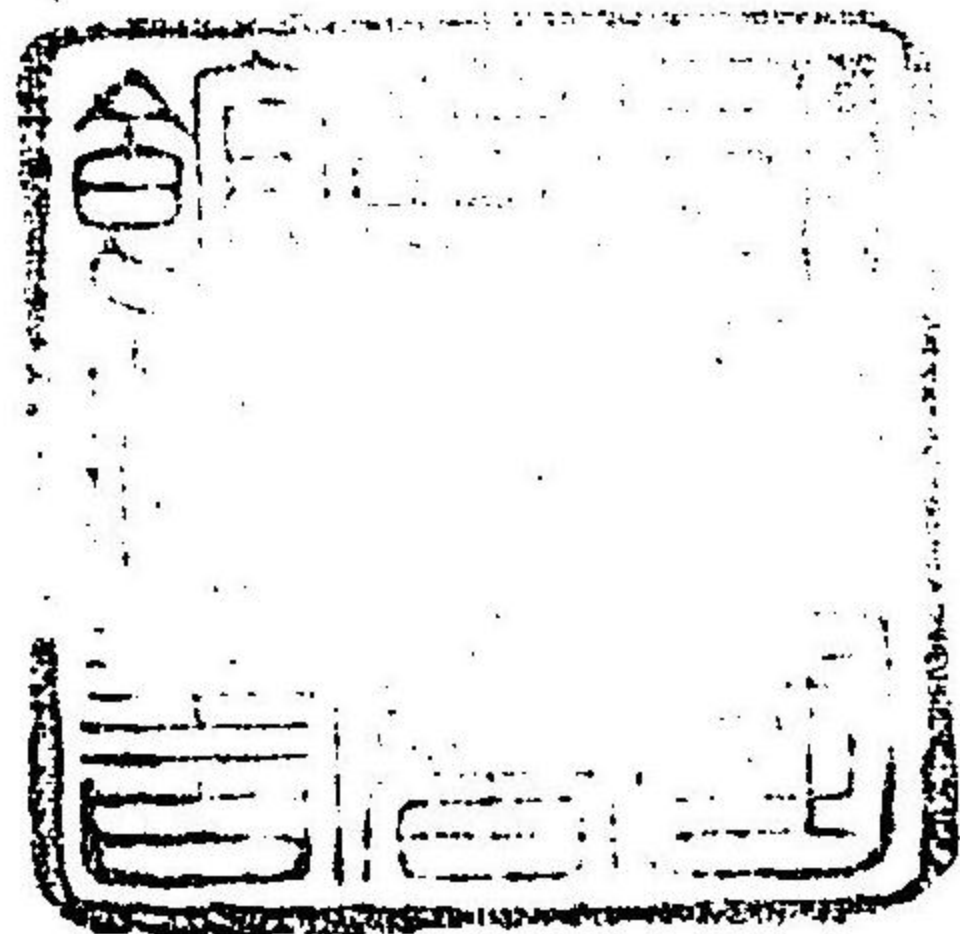
初等東洋史弁言六則

(第一)予昨春中等東洋史を著はして、中學の教科に充てんと志し、が卷帙や、浩瀚に失せしかば、今新に前書を省略訂正して本書を上梓し、以て中學の教科に應せんとするなり。

(第二)本書は中等東洋史を省略せしものなるが故に、中學教師にして本書の源流を委曲にせんと欲する者は、必ず中等東洋史を参考するを要す。

(第三)本書と中等東洋史との間、事實に就き若くば年代に就きて、時こ出入異同なきにあらず。姑く本書を以て定説となすべし。

(第四)本書を學ぶ者は、必ず拙著中等東洋沿革地圖に就きて、各時代に於ける事變と、其舞臺との連鎖を明瞭ならしむるを要す。



337057

(第五)本書の固有名詞は、必しも原音に従はず。漢史に散見せる外國の地名、人名、及其他の固有名詞にありては、力めて其漢字の發音と相近接するものを探り、原音の何國語たるを問はず。例せば卑路斯を『フエロツエ』といはずして『フイロマ』と訓し、黠戛斯を『キルギス』といはずして『カツガズ』と訓し、嚙噠を『セダル』といはずして『エフタル』と訓するが如き是なり。漢史に傳はらざる外國の固有名詞は、主として英音に據る。これ中學生徒の最も慣用する所なればなり。

(第六)本書編纂の大方針は、曩に中等東洋史の開卷に掲けたる弁言十則中に備はれば、今又斯に贅せず。

明治卅二年二月

著者識

初等東洋史目次

第一篇 上古期 漢人種膨脹時代

第一章 太古……………一

第二章 周の盛衰……………五

第三章 覇者の興亡……………一〇

第四章 春秋の末世及戰國の初世……………一四

第五章 秦の興隆……………一九

第二篇 中古期 漢人種優勢時代

第一章 秦の盛衰……………二三

第二章 西漢の初世……………二七

第三章	西漢の極盛	三
第四章	匈奴の盛衰	三五
第五章	西漢の末路	四一
第六章	東漢の復興	四四
第七章	佛教の傳播	四六
第八章	東漢の極盛	五三
第九章	東漢の末路	五七
第十章	三國の鼎立及西晉の興亡	六二
第十一章	塞外人種の侵入	六五
第十二章	五胡の興亡及東晉の盛衰	六九

第十三章	後魏の盛衰	七七
第十四章	隋の盛衰及唐の初世	八二
第十五章	唐の外國經畧	九二
第十六章	唐の極盛	一〇六
第十七章	唐の中世	一一三
第十八章	唐の衰滅	一二〇
第三篇	近古期 蒙古人種最盛時代	
第一章	契丹の興隆及五代の紛亂	一二四
第二章	宋の一統	一二九
第三章	遼の極盛及西夏の興起	一三三

第四章	宋の制度改革	一三六
第五章	女眞の興隆	一四〇
第六章	金宋の攻戦	一四五
第七章	蒙古の興起	一五一
第八章	蒙古の西征	一五五
第九章	金の滅亡	一六〇
第十章	宋の滅亡	一六四
第十一章	元初の外征	一六八
第十二章	元の極盛	一七二
第十三章	元の衰微	一七七

第十四章	明の興隆	一八一
第十五章	蒙古諸汗國の盛衰	一八八
第十六章	明の内憂外患	一九六
第十七章	倭寇及明の末路	二〇三
第四篇 近世期 歐人東漸時代		
第一章	滿州の興起	二〇九
第二章	明の滅亡	二二二
第三章	歐人の東漸	二二七
第四章	俄羅斯の東侵	二三四
第五章	清の塞外經營	二三八

第六章 清の東南方經畧……………二三七

第七章 清の官制及兵制……………二四四

第八章 英人の印度侵畧……………二五二

第九章 阿片戰爭……………二六三

第十章 中央亞細亞の形勢……………二七〇

第十一章 英露の衝突……………二七七

第十二章 佛國の後印度侵畧……………二八二

第十三章 日清の衝突……………二八七

目次終

初等東洋史

文學士 桑原隲藏著

第一編 上古期 漢人種膨脹時代(四百四十年以前)

第一章 太古

漢人種の
起源

今日支那本部に蔓延せる漢人種は、少なくとも今より五千餘年前の古代に、西北の方面より、次第に支那内地に移住し來りし者なり。彼等は其初め、黃河附近の地に幾多の部落をなし、各其部長を戴きしが、年月を経るに従ひ、其部民多くして、最も威勢ある部長は、次第に近傍の諸部長を服

従せしめて、共同の大部長となる。之を元后といひ、後世の皇帝の姿をなし、服従せられたる諸部長は之を群后といひ、後世の諸侯の姿をなすに至れり。

此元后の中にて、最も有名なるは黄帝なり。彼は今より四千二百年前の古代に出でし英主にして、頻に四方を征服し、遂に東は海より、西は今の甘肅の西部に至り、南は揚子江より、北は今の直隸、山西の北部に達する一大帝國を建て、此の如くして、支那に於ける一統政治の基礎を定めたり。

黄帝の後、二百餘年にして、帝堯、帝舜の二英主相繼ぎて出で、鯀、驩、兜以下、當時の大群后にして、帝命を奉ぜざる者を

黄帝一統政治の基礎を開く

帝堯帝舜の時代

誅戮して、元后の威嚴をたて、又中央政府には、百揆(政務を總理す)、司徒(教育を掌る)、士(刑罰を掌る)、共工(工業を掌る)等の諸官をおきて、政務を分擔せしめしかば、一統政治の根柢漸く鞏固となれり。帝舜に繼ぎて、夏后禹帝位に即く。帝堯、帝舜の際、九年間の大洪水ありしを、禹よく之を治めしより、天下の歸服を得、後遂に群后に推れて元后となり、安邑(山西省解州夏縣)に都し、國を夏と號せり。これ實に我紀元前千四百年の頃なり。黄帝以前より、幾多の群后諸方に割據して、自から封建の姿をなし、が、禹王の時に至り、天下の群后尙ほ三千に餘りて、勢力頗る強く、殆ど元后廢立の權を握りしが、彼等も深く禹王の治水の大功に心服し、従うて長く元后の位を

夏の禹王の世を君主の基礎を定む

禹王の子孫に傳ふることとなり、支那に於ける世襲君主の基は斯に定まれり。

夏亡び殷興る

禹王の後、其子孫相嗣ぎて天下に君臨せしが、十三世の孫なる王履癸は、世に所謂桀王にして、暴虐なりしかば、我紀元前九百年の頃、商后湯は諸侯より起りて之を滅ぼし、代りて帝位に即き、亳(河南省歸德府商邱縣)に都し、國を商と號せり。湯王の後十數傳して、王盤庚の時、水災を避けて都を殷(河南省南府偃師縣)に遷し、かば、是より商又殷と稱せり。王盤庚の後更に十一傳して、王受辛に至る。所謂紂王にして、暴虐なりければ、周后發は諸侯を率ゐて之を滅ぼし、代りて帝位に即く。時に我紀元前三百九十一年なり。

殷亡び周興る

第二章 周の盛衰

周后發は昌の子なり。昌は世に所謂文王にして、聖徳ありしが、發其後を承けて、益諸侯の歸服を得、遂に紂王を滅ぼして、都を鎬(陝西省西安府)に奠め、國を周と號せり。所謂武王是なり。武王幾ならずして死し、子成王尙ほ幼なりしかば、其弟周公旦、召公奭共に政を攝し、天下を兩分し、召公は其西半を主どり、周公は其東半を統べたり。周公は又周一代の制度を定めしが、こは支那歴代の制度の本源となれるものなれば、左に之を畧述すべし。

周公制度を定む

封建の制

(第一)封建 周公は天下の諸侯を分ちて、公、侯、伯、子、男の五

等となす。公侯の封地は方百里(凡そ我方十一里半四方)ありて、之を大國といひ、伯の封地は方七十里(凡そ八里四方)にして、之を中國といひ、子男は共に其封地方五十里(凡そ五里半四方餘)にして、之を小國と稱せり。當時天下は九州に分れしが、其中、中央の一州方千里の地は、王の直領に屬し、其餘の八州は皆諸侯の領地に歸し、其數凡そ千八百に近かりしといふ。而して八州には、各伯をおきて州内の諸侯を制馭せしめしかば、天下をすべて八伯あり。八伯は其配下の諸侯を率ゐて、周公召公に分隸し、此の如くして中央政府と、地方の諸侯との連絡を保てり。

(第二)官制 周公は中央政府に、天地春夏秋冬の六官を設

周の官制

官	長	職	掌
天官	大家宰	天下の政治を總理す	
地官	大司徒	教化を掌る	
春官	大宗伯	祭祀及禮樂のことを掌る	
夏官	大司馬	兵馬を掌る	
秋官	大司寇	刑罰を掌る	
冬官	大司空	百工のことを掌る	
官	長	職	掌

けて、國治を分擔せしめたり。六官の職掌は大畧左の如し。

周の田制

(第三)田制 支那の古代に在りて、田租は政府の主要なる歳入となりたれば、周公も亦尤も其意を田制に用ゐたり。即ち其王都に近く、人家稠密にして土地狹隘なる所には、家毎に田百畝(凡そ我一町九段弱)を授け、其十畝の所得を朝廷に納めしむ。之を貢法といふ。又王都に遠く、人家稀少にして、土地廣漠なる所には、井田の法を用ゐ、九百畝を一井となし

宣王と幽王と

て之を九分し、其八部を八家に分授して、其所得を私有せしめ、中央の一部百畝を公田となし、八家にて之を耕作し、其所得を朝廷に納めて租税に充つ。之を助法といへり。成王及其子康王の時は、天下頗る太平なりしが、其後王室次第に衰微し、諸侯漸く専横にして、或は王號を僭し、加之四方の夷狄も亦漸く内地に逼れり。成王の後、凡そ四百年にして宣王出で、内は賢相に任じて國政を正し、外は名將を擧げて夷狄を攘ひ、一時王室を恢復せしが、其子幽王無道なりしかば、諸侯離畔し、西戎之に乗じて遂に王都鎬を陥れ、幽王を殺せり。(皇紀前百十一年)幽王の子平王は、諸侯の救によりて、位に洛邑(河南省河南府)に即

周の東遷

けり。初め武王の時、都を鎬に奠めしが、山河重疊して交通便ならざれば、成王の時更に洛邑を營み、之を東都となして諸侯の會合の所となし、鎬を西都として王の居所に充てしが、今や西都は西戎に陥りし故に、爾來周王は皆東都に住することゝなれり。之を周の東遷といひ、實に我紀元前百十年に當れり。然れども東遷以後、周の王室は愈衰へ、殆ど無政府の有様を呈するもの五百年、史家之を春秋戰國の世とす。春秋の世とは、東遷後凡そ三百年間を指す。此時代の事跡は、孔子の作りし春秋の中に錄せらるゝを以てなり。此間に小諸侯は畧併吞せられて、遂に七大諸侯となり、互に攻争を事とせしより、春秋の後二百餘年間を指

春秋及戰國時代

して、戦國の世と云ふなり。

第三章 覇者の興亡

支那古代の諸侯は、其數頗る多く、周の初世には、千八百に及びしが、其後次第に相併吞せしも、春秋の初世に至りて、尙ほ百六十に餘れり。彼等は王室の衰へたるを機として、攻争を事とし、四方の夷狄は、又之に乗じて、愈内地を侵畧し來り、漢人種の運命實に危殆を極めたり。是に於て諸侯の有力なる者は、王命を藉りて諸侯の盟主となり、内は彼等の攻争を抑へ、外は彼等の力を協せて、夷狄の侵畧を防がんと志すに至れり。之を覇者といふ。初めて覇者となり

覇者の起
り次第

しは齊の桓公なり。

(第二)齊の覇業 齊は今の山東の大部を占め、其都は薄姑

桓公と管
仲と

(山東省青州府博興縣)なり。皇紀前廿五年の頃、桓公其國に主となり、

管仲に任じて、頗る富強を致し、遂に王命を以て諸侯の覇者となり、(皇紀前十九年)其兵を合せて北狄を攘ひ、又南に向うて楚を屈せり。是より先き、楚は中國の諸侯の相攻争せるを機として、次第に領土を北に擴めしが、桓公始めて之を屈服せしめ、一時其北畧を防止するを得たり。然れども、幾ならずして管仲、桓公相尋ぎて死せしかば、齊の覇業衰へ、楚は其勢を恢復して、殆ど中國を併吞せんとせしが、幸に晋の文公は、復諸侯の覇者となりて之を挫けり。

齊衰へ晋
興る

文公の覇業

（第二）晋の覇業 晋は大抵今の山西の地を占めて絳（山西省平陽府翼城縣）に都せしが文公其國に主となるや（二十六年）會王室は北狄の苦しむる所となりしかば、文公其難を救ひ、又中國の諸侯を率ゐ、楚を城濮（山東省曹州府濮州）に破りて其北侵を妨げ、遂に王命を以て覇者となる。（二十九年）然るに其孫靈公の時に至りて内亂起り、晋の國威の衰へたるに乗じ、楚は遂に中國の諸侯を壓服して覇者となれり。

晋衰へ楚興る

（第三）楚の覇業 楚の根據地は、今の湖北にして、郢（湖北省荊州府）に都せり。周の東遷の後、武王、文王等の賢主其國に君臨し、次第に近傍の小諸侯を併せて、勢頗る強大となり、莊王其國主となるに及び（四十八年）晋の内亂を機として之を鄭（河南省開

吳越の盛衰

鄭（封州府）に破り、代りて中國の覇者となりしが、其孫平王の時、内亂ありしかば、吳は之を襲ひ破り、其勢によりて中國の覇者となれり。

（第四）吳及越の覇業 吳は姑蘇（江蘇省蘇州府）に都して、今の江蘇の地を占む。闔閭（閩）其國主となるに及び（七十四年）楚の國都を陥れて江淮（揚子江と淮水の間をいふ）の地を併吞し、其子夫差の時、南越を降し、遂に中國に入りて覇者となりしが、越王勾踐其虐を襲うて吳を滅ぼし（八十八年）代りて覇者となれり。

越は今の浙江の地を占め、會稽（浙江省紹興府）に都せり。吳と境を接せしを以て常に相攻争せしが、勾踐遂に吳を破り、一時強大を極めしも、勾踐の後、國勢漸く振はず。楚は之に乗じ

て、次第に勢を恢復し、遂に越を征服して(三百二)復南方に雄視するに至れり。

第四章 春秋の末世及戦國の初世

周は東遷の後、天子の實權なかりしも、尙ほ幾分の威嚴を存して、天下の尊敬を受くるに足りしかば、諸侯も亦必ず王命を請うて覇者となりしが、其後覇者輩出して、天下の大權悉く大諸侯に歸せしより、彼等は其勢を負ひ、各王室を倒して、天下を統一せん事を望みければ、春秋の末世より、戦國の初世にかけて、復一人の尊王を説く者なく、全く大諸侯競争の舞臺となれり。

王室の威嚴次第に地に墜つ

陪臣次第に權勢を得

田齊と三晋と

戦國の七雄

且つ又覇者興りてより、諸侯は常に外に出で、會盟に忙はしく、従うて國事は多く之を其重臣に委ねしより、彼等は頻に私惠を施して、國民の歸服を得、次第に權力を増進して、遂に其主家を篡ふに至れり。晋の重臣に韓、魏、趙の三氏ありて、晋地を分領せしが、遂に王命を以て諸侯となり、(二百八十五年)齊の重臣田氏も亦齊を篡ひ、命ぜられて諸侯となる。(二百七十五年)之を田齊といふ。春秋の初世に於ける列國、今や殆ど滅亡し盡き、其よく大諸侯の面目を保てる者、北に燕、南に楚、西に秦あるのみ。此三舊國に、田齊、韓、魏、趙の四新國を加へて戦國七雄と稱す。其割據の形勢大畧左表の如し。

唱へ、荀況は戰國の末に出で、荀子を作りて性惡を唱へた

老子及道家

楚、著書

莊子と列子と

列御寇、著書

庄子

莊子より

莊子より

墨翟及楊朱

朱

墨翟、著書

楊朱、著書

墨翟

孔子と殆ど同時に、楚に老子出づ。姓は李、名は聃といふ。道徳經を著はし、専ら自然を尙び、無爲を唱へて禮儀、制作を排せり。老子の後百年にして、列禦寇は列子を著はし、其後莊周更に莊子を著はし、共に老子の道を顯揚せり。其道を奉ずる者を道家といひ、道家は一變して道教となる。道教は儒教、佛教と相對して、今日尙ほ支那に流行せり。孔子、老子出で、より、北方の學者は多く孔子を祖述し、南方の學者は多く老子を祖述せしも、尙ほ其間に在て異説を立つる者少からず。墨翟は兼愛の説を唱へて、墨家の祖

法家

秦の孝公と商鞅と

となり。楊朱は之に反して自愛の説を主張せしが、商鞅、韓非の輩、法と術とを説くに及んで、又法家の名あり。此の如く諸學派崛起して、互に論難、辯駁を事とせり。

第五章 秦の興隆

秦はもと渭水の上流に國せし一小諸侯なりしが、周の東遷の後、秦は頻りに西都附近の西戎を征服して、今の陝西の地を併せ、國勢強大となり、孝公其國に主となるに及んで、^(三百)英明にして大志あり。重賞を懸けて天下の名士を招き、遂に商鞅を用ゐて國政を一變せり。其改革の要點は主として國の財源と、兵力とを増進するに在り。

（第一）財源を豊にせんが爲に、民に二男以上ありて分家せざる者は、其賦を倍して歳入を増し、又農耕、紡織に勤むる者は其力役を免じ、之を怠る者は官に没して奴婢に充て、以て國內の農、工業を奨励せり。

（第二）兵力を強くせんが爲に、一切の爵位は、軍功によりて之を授け、王族と雖ども、軍功なき者は其籍を除けり。

此の如く外は天下の賢材を招致し、内は財力、兵勢を増進せしかば、幾年ならずして、秦の國勢頗る強大を加へ、殆ど天下を併呑するの勢あり。是に於て、從來攻争を事とせし自餘の六國は俄に攻守同盟を結ぶに至れり。之を合従といふ。従は縦と同じく、南北の義なり。當時六國の位置南北

に列せしが故に、六國同盟するを合従といふ。始めて合従の説を唱へて、六國を同盟せしめしは蘇秦なり。（三百二）然れども幾ならずして同盟壞れしかば、秦は之を機とし、張儀をして諸侯に説くに、合従の不利にして、連衡の利なるを以てせしむ。（三百五）衡は横と同じく東西を指す。當時秦は西に在りて、六國其東に位しければ、六國の秦に服従するを連衡と云ふなり。

蘇秦・張儀が合従、連衡の説を唱へしより、天下の士其風を襲うて、四方に游説する者頗る多く、六國の君主も亦、或時は合従して秦に抗し、或時は連衡の説を納れて秦に服し、形勢反覆一ならずしが、六國の團結終始鞏固ならず

しと、其君主概ね暗愚なりしとにより、遂に前後して秦の討滅する所となれり。

六國及周の滅亡と秦の一統

孝公五世の孫、嬴政秦に王たるに及んで、(四百十)六國の相和せざるに乘じ、遠交近攻の策をとりて之を孤立せしめ、又其國君の暗愚なるを利し、反間を放ちて君臣を疑はしめ、然る後に猛將をして之を攻めしめしかば、韓先づ亡び、(四百三)趙、魏、楚、燕、齊の諸國も亦之につげり。周の王室は、平王より廿四傳して赧王に至りしが、さきに已に秦に降りしを以て、(四百五)六國の滅亡と共に、天下全く秦の統一する所となれり。(四百四)

第二篇 中古期 漢人種優勢時代(四百四十一)年乃至千五百六十七年

第一章 秦の盛衰

秦の始皇帝

封建を廢し郡縣を興す

秦王嬴政已に天下を一統してより、自から始皇帝と號し、周代諸侯跋扈して、王室衰微せしに鑑み、専ら帝權を擴張して、世襲の基礎を鞏固にせんが爲に、左の方法を採れり。
(第一)政治の劃一を圖らんが爲に、六國滅亡の後、一族功臣に唯歲入の幾分を給して土地を與へず。天下を擧げて、皇帝の直隸地となし、之を卅六郡に分ち、各郡に守尉、監をおく。守は民治を、尉は兵事を掌どり、監は之を監視す。中央政府には、丞相、太尉、御史大夫ありて、天下を統轄す。丞相は

秦の新官制

天下の大政を統べ、太尉は天下の兵事を統べ、御史大夫は丞相と太尉とを監視すること、郡と異なるなし。而して中央政府より地方の官吏に至る迄、皆皇帝の任命にかゝり、朝廷の租税に衣食する者なるが故に、君權頗る強大となれり。

富豪を國都に徙す

(第二)民間の兵器を收め、又天下の富豪を國都咸陽に聚めて、騷亂の源を塞げり。

土木を起す

(第三)天子の尊嚴を誇示せんが爲に、盛に土木を起し、阿房宮を渭水の南に作る。(四百四十九年)東西二百間、南北四十丈あり。又離宮七百を建て、皆華麗を極めたり。

書を燒き、儒を坑にす

(第四)當時天下の學者は、戰國時代の餘風を受け、政治を可

獵 獲

長城を増築す

否して治安を妨げしかば、遂に挾書の禁を發し、民間の書を收めて之を燒き、(四百四十八年)尋で學者四百餘人を坑殺して、其流弊を絶てり。(四百四十九年)

此の如く始皇帝は國內に帝權を張ると共に、其六國を統一せし威勢を駈りて外征を企て、一は國威を發揚し、一は内亂を防壓せんと試みたり。戰國の末より、蒙古地方に匈奴崛起して、次第に支那内地に逼りしかば、秦、趙、燕等の北邊の諸國は、皆長城を築きて之に備へしが、始皇帝遂に蒙恬をして之を擊破し、河南(今の鄂爾多斯)の地を取らしめ、舊來の長城を増築して、所謂万里の長城となし、匈奴の入寇を禦ぎ、(四百四十七年)又南に向うて南越(今の廣東、廣西より安南に至る)を畧取せり。

支那の國名の起原

是に於て秦の威名遠く外國に振ひ、外國人は秦を訛りて支那といひ、遂に今日の國號となれり。

亂源二世皇帝に至りて破裂す

然れども土木に外征に、人民は奔命に疲れて亂を懷ひ、殊に書を焼き儒を坑にしてより、天下の學者四方に散じて人民を煽動し、六國の遺族、舊臣等も亦所在に恢復を志しければ、始皇帝死し、宦者趙高其子二世皇帝を擁立して、政權を擅にするに及んで陳勝先づ兵を斬(安徽省鳳陽府宿州)に起して王を稱し、(四百五十二年)之につぎて叛亂四方に起れり。

項羽と劉邦と

時に楚の舊臣項羽は、其主懷王を奉じて兵を吳(江蘇省蘇州府)に起し、が劉邦も亦沛(江蘇省徐州府沛縣)より起りて之に應ぜしかば、兵勢大に張り、頻に諸郡を陥れ、劉邦は漢水に沿ひ、項羽

劉邦秦を降す

は黄河に沿うて西に進み、直に咸陽に逼れり。二世皇帝大に驚き、趙高を譴責せしかば、趙高は反つて之を弑し、其從子子嬰を立てしが、幾ならずして子嬰之を族誅せり。是時劉邦の兵已に咸陽に逼りければ、子嬰は遂に出で降れり。(四百五十四年)秦天下に帝たること僅に十五年に過ぎず。

第二章 西漢の初世

項羽西楚の霸王と號す

初め懷王諸將に約して、先づ秦を降し、者に關中の地を與へんことを定めしが、項羽は劉邦の功を嫉みて約を奉せず。強ひて劉邦を漢中、巴蜀の僻地に王たらしめ、且つ懷王を江南に移して後之を弑し、自から西楚の霸王と號し、

劉邦項羽を斃して天下を一統す

彭城(江蘇省徐州府)に居りて、天下の政權を掌握せり。劉邦は一時漢中に退き、蕭何に國政を委ね、韓信に軍事を委ね、張良を謀臣として、日夜復讐の機を伺ひしが、會山東河北の地亂れ、項羽の之が鎮壓に出陣せるを利し、急に襲りて彭城を陥れたり。(四百五十六年)項羽軍を還して之を逆へ、攻争四年に及びしが、遂に力屈して烏江(安徽省和州)に自殺し、(四百五十九年)劉邦帝位に即く。之を高祖となす。もと漢中に王たりしを以て國號を漢と稱し、都を西長安(陝西省西安府)に奠めしが故に、史に之を西漢と稱せり。

高祖の項羽と戰ふや、重賞を懸けて豪傑の士を招きしが、天下一統の後には、漸く其強大を恐れ、且つ又深く秦の孤立

子弟を分封して藩屏に備ふ

して敗亡せしに懲りければ、機會ある毎に、諸功臣の封地を沒收して其子弟に與へ、以て皇室の藩屏に備へたり。然れども此等同族の諸王の封地頗る大に過ぎ、其權勢も亦強きに過ぎたるが故に、内外輕重の勢を失ひ、反つて後年の禍亂を養成せり。封王の多しを以て

高祖死し、(四百六十六年)子惠帝嗣ぎ、惠帝の後、高祖の皇后呂氏一時政權を握りしが、惠帝の弟文帝遂に位に即けり。(四百八十二年)

帝性勤儉なりしかば、國用蓄積し、屢田租を除きて民力を休養し、天下頗る太平なりしも、其實諸王專横の風は、此間に在りて其極に達し、文帝の死後幾ならずして反亂起れり。

吳楚七國の亂

封建の制
廢して郡
縣の治行
はる

曩に高祖皇室の藩屏を鞏固にせんが爲に、過度の封地、權勢を、同族の諸王に附與せしより、諸王の跋扈漸く甚だし、文帝の政寛仁なるに乗じて、殆ど朝命を奉ぜざるに至り。是に於て文帝の子景帝立つや、鼂錯の勸に従ひ、やゝ諸王の封土を削奪して、朝廷の威勢を張らんとせしかば、吳王は楚、趙、膠、西、膠、東、菑、川、濟南の六國王と兵を連ねて朝廷に反抗せしが、周亞夫の爲に平定せられたり。之を吳楚七國の亂といふ。(五百年)

七國の亂平ぎてより、景帝は諸侯王を京師に留め、復國に就かしめず。其封國には、朝廷より官吏を派して、其政を執らしめしが故に、諸王の國も其實天子の直隸地に異なる

なく、封建の制斯に廢して、郡縣の治専ら行はれたり。

第三章 西漢の極盛武帝代

武帝儒學
を興し文
學を奨む

景帝に嗣ぎて武帝位に即きしが、(五十二年)文帝勤儉の結果として國庫充實し、景帝が諸王を抑損せし後を承けて、帝權強大なりしかば、元來雄畧大志に富める武帝は、内は學術、文學を獎勵し、外は征伐、遠圖に従事せり。

惠帝の時已に挾書の禁を解きしも、(四十七年)學術未だ盛ならざりしが、武帝の時始めて儒學を尊崇し、五經(易、詩、書、禮、春秋)博士をおけり。(五十二年)是より支那歴代の政教、必ず儒學を表式となすに至れり。武帝又文學、詞賦(詩)を獎勵せしかば、司馬

相如司馬遷等の名家輩出せり。然れども武帝の大功業は外征に在り。帝は先づ西南の蠻族を征服し、尋で朝鮮を滅ぼし、又西域諸國に通じ、匈奴を撃破して、連に漢の領土を擴めり。カマニヤト社 西南の蠻族

社邑

武帝閩越及南越を併す

(第一)西南蠻との關係 楊子江以南の地は、夙に今の安南、暹羅一帶に蔓延せる交趾支那人種の占領に歸し、久しく漢人種の勢力以外に立てり。秦の時一旦南越を平定せしも、秦の滅亡と共に復化外の區となり、今の廣東、廣西、安南の地は、再び南越に歸し、其北今の福建の地に閩越興り、閩越の北、今の浙江の地に東甌興りしが、閩越最も強く、東甌を併せ、又南越を侵す。南越救を漢に請ひしかば、武帝は兵

夜郎國及滇國漢に内降す

を發して閩越を平定し、(五百二)後復南越の内亂あるに乗じ、之を滅ぼして悉く其地を併せり。(五百五)

楊子江の上流に當れる、今の四川、貴州、雲南の地も亦、夙に交趾支那人種、殊に圖伯特人種の占領に歸せしが、武帝の時、唐蒙始めて蜀(四川省成都府附近一帶)より夜郎國(貴州省遵義府附近一帶)に通じて、之を漢に内屬せしめ、(五百三)尋で張騫西域より歸るに及んで、武帝は蜀の西南に身毒國(印度)あるを聞き、張騫

をやりて其通路を求めしめ、志を遂げざりしも、始めて滇國(雲南省雲南府附近一帶)に達するを得て、之を漢に内屬せしめしか

ば、(五百三)西南蠻は概ね漢の羈縻する所となれり。

(第二)古朝鮮との關係 曩に殷の亡ぶるや、其王族箕子は

古朝鮮の起源

武帝古朝鮮を滅ぼす

我國及三韓と漢との交通漸く開く

遼東に往き、推されて古朝鮮の王となれり。當時古朝鮮の地は、西は遼河より東は涓水(江大同)の間に跨り、箕子の子孫世王險城(平安道平壤府)に治して斯に君臨せしが、箕準(箕子の子孫)の世に至り、燕人衛滿之を襲ひ、代りて古朝鮮の王となる。(四百年)其孫衛右渠の時、屢漢の命に抗せしかば、武帝海陸の大軍を發して之を滅ぼし、其地を郡縣となせり。(五百三年)

古朝鮮の南、今の朝鮮半島の南部一帯には、韓人種蕃殖し、大別して馬韓、辨韓、辰韓の三部となり、馬韓は今の京畿、忠清、全羅三道の地を占め、辰韓は慶尙道の東北部、辨韓は其西南部に據りしが、武帝古朝鮮を滅ぼしてより、漢と三韓との關係漸く頻繁となり、從うて三韓と交通し來れる我國人と、漢との交通も亦、此頃より開け、西漢の末、東漢の初に至りては、我九州地方の酋長等漢に私貢して、其印綬を受くる者あるに至れり。

第四章 匈奴の盛衰

万里長城以外

武帝の時に當り、塞外(塞外)に雄視せしは匈奴にして、武帝が外征の目的も、其實之が跋扈を制するに在りければ、已に西南蠻を平げ、古朝鮮を滅ぼしてよりは、一意北に嚮うて匈奴の征伐に従へり。

匈奴は戰國の末より崛起せし土耳其古人種の一種にして、其君主を單于(単于)といふ。天子の謂なり。西漢の初め、冒頓(冒頓)匈奴

匈奴の冒

匈奴と漢との交渉

西は

張騫月氏に使す

に單于たりしが、武畧ありて東は東胡を却け、西は月氏を破ぶりて大に領土を擴め、其子老上、其孫軍臣、其後を承けて、月氏の地を奪ひしかば、其領地東は今の滿州より、西は今の圖伯特の間に跨り、天山南北兩路の諸國も皆之に役屬せり。是に於て匈奴は其勢を負ひ、頻年漢の北邊に入寇せしが、漢は高祖以來、歲幣を贈りて其鋒を避けしかば、匈奴益、專横となれり。武帝位に即くに及んで、前代の怨を報ぜんんと欲し、さきに匈奴に逐はれたる月氏と同盟して、匈奴を夾撃せんが爲に、張騫をして西月氏國に使せしむ。(五十二年) 是より先き、希臘にアレキサンドル出で、波斯を滅ぼし、

大夏と安息

匈奴月氏及烏孫の關係

亞細亞の西部を併呑して、一大帝國を建てしが、幾ならずして死せしかば、部將ゼリヌクス代りて其地を領し、シリア王となれり。(三百年) 其後シリアの國威振はざるに及んで、其屬地なる大夏、安息の二國皆獨立せり。(四百五年頃) 大夏は所謂バクトリア國にして、今の阿母河の兩岸を占め、安息は其西に當りて、裏海の沿岸を領し、所謂バルチア國なり。大夏は後安息に敗られ、其國力頓に衰へし時、月氏は匈奴に逐はれて西に遁がれ、大夏を征服して其地を奪へり。月氏はもと河西(黄河以西の地)の地に據りし圖伯特人種なり。秦、漢の際、其勢殆ど匈奴と相當りしも、後頻に匈奴の爲に敗亡せしかば、餘衆遂に西に奔り、暫く今の伊犁地方に

大月氏國の建設

武帝時代に於ける西域の狀

據りしが、曩に月氏の河西に在りし時、其隣國烏孫を苦めしを以て、烏孫は今や前日の怨を報せんが爲に、匈奴の援兵を乞ひ、月氏を破りて伊犁の地を占領せり。月氏は更に南に遁がれ、媯水(阿母河)の濱に到り、大夏を臣服せしめて大月氏國を建て、(五百年)安息と境を接するに至れり。

是故に張騫の西に使せし當時の狀、軀を見るに、葱嶺の西に在りては、安息、大月氏の二國最も強く、大月氏の北には大宛國ありて、今の費爾干地方を占め、更に其北に康居國ありて、今の吉利吉思荒原附近を領し、康居の東南、大宛の東に烏孫國ありて、今の伊犁地方を占めたり。烏孫の東南より、匈奴の西邊に當りて、疏勒(喀什噶爾附近)、于寘(和闐)、龜茲(庫車附近)焉

著(喀喇沙爾附近)以下の小國、すべて卅餘國ありしが、此等の諸小國は、烏孫、康居、大宛と共に、皆匈奴に臣服しければ、張騫は

中途にして、匈奴に囚はるゝこと十年に餘りしも、遂に脱して大月氏に至り、攻守同盟の策を説きしも、大月氏は已に肥沃の地を占めて、復戦争を好まざりしかば、遂に要領を得ずして歸れり。(五百年)

武帝は大月氏との同盟に失敗せしも、其間李廣、衛青、霍去病等の諸名將に命じて、屢、匈奴を破り、遂に河南、河西の地を收めて、朔方、武威、張掖、酒泉、燉煌の諸郡をおき、更に燉煌(甘肅省安西)より、輪臺(天山南路)に至る間に、屯田兵を配置せしかば、天山南路の諸國は、前後漢に歸服するに至れり。

武帝連に匈奴の地を奪す

漢と烏孫
との同盟

天山南路の道通じたれば、武帝は更に烏孫に説きて同盟を結ばんとす。烏孫は曩に匈奴の助を得て、伊犁地方を占領せしも、勢を得るに従うて、漸く匈奴と隙ありしかば、直に漢の勸に應ぜり。(五百五十六年)

昭帝の終

武帝は匈奴討滅の素志を遂げずして死せしも、(五百七十四年)宣帝其後を承け、烏孫と同盟し、大に匈奴を撃破して、其牛馬七十餘万頭を奪へり。(五百九十年)是に於て、從來匈奴に臣屬せし西域諸國は、皆叛きて漢に歸せしかば、宣帝始めて鄭吉を西域都護に拜し、烏壘城(天山南路の策特爾)に在りて、西域一帯を統御せしむ。(六百一年)

匈奴の内訌

鄭吉初め
て西域都
護となる

匈奴は外漢カに敗れ、又内亂起りて、骨肉相平がず。老上單于

老上單于

匈奴漢に
歸服す

五世の孫なる呼韓邪單于是、其兄郅支單于と争ひしが、敗亡して漢に來降し、其保護に頼りて郅支を破ぶる。郅支は西に遁がれ、康居國王に依りて恢復を圖りしかば、當時の西域都護甘延壽は、副將陳湯と謀り、急に襲うて郅支を殺せり。(六百二十五年)是より匈奴の勢威全く衰へ、呼韓邪單于是漢に歸服して、復邊に入寇せず。

第五章 西漢の末路

武帝諸新
法を行
うて財源を
求む

武帝頻年兵を塞外に用ゐ、又方士の説を信じて、宮觀を建て、巡遊封禪を事とせしかば、國用給せず。是に於て桑弘羊等の理財に長せる者を登庸して、或は人民に錢を納れて

官爵を買ひ、又死罪を贖ふを許し、或は民間にて、鐵器を鑄、海鹽を煮、若くば飲酒を醸すを禁じ、皆之を官の專業となし、或は舟と車とに課税して、偏に賦歛を重くせしかば、百姓疲弊して所在に盜賊起れり。平準法

武帝の後、少子昭帝嗣ぐ。(五百七年)霍光遺詔を受けて政を輔け、賦税を軽くして専ら民と休息せり。昭帝の後一傳して、宣帝位に即きしが、(五百八年)尤も意を國治に用ゐ、官吏の治績ある者には、璽書を賜ひて獎勵せしかば、中央政府にも、地方にも、良吏輩出して太平を致せり。

宣帝の中興

宣帝已に内治に勤め、又邊備を忽にせず。趙充國をして、先零以下の諸羌を撃ちて、青海附近の地を取らしめ、又鄭吉

宦者外戚相繼ぎて朝政を執る

外戚王莽西漢を篡

陳湯等を任用して、頻に國威を西域に張り、實に西漢中興の主なりしが、子元帝立つに及んで、(六百十年)多病にして、政を宦者石顯等に委ねしより、漢業漸く衰へ、尋で成帝其後を承け、(六百二十年)石顯等を黜けしも、外戚王鳳を信任せしかば、外戚宦者に代りて政權を擅にし、遂に西漢覆滅の漸を啓けり。

成帝の後二傳して平帝に至る。時に王鳳の從子王莽は、其女を納れて皇后となし、朝政を專にす。王莽固より逆望を抱き、士を養ひ賢を禮して世を欺きしかば、名聲益隆となり、上書して其徳を頌する者、四十八万人の多きに及べり。是に於て彼は遂に平帝を弒し、其後幾ならずして自から

長平

漸く外國
交通始り佛
教傳まらう

阿利安人種

南印度より西
南行す波斯
南印度より西
南行す波斯
種セトヤリ

阿利安人
種ノ南下

移居マラウ
カマヤ

の士も亦多かりき。光武帝の後、子明帝、孫章帝皆よく父祖
の遺業を紹ぎ、其間凡そ卅餘年間、天下頗る無事なりしが、
方に此時に際して、佛教は印度より東漸して、支那に傳來
せり。

第七章 佛教の傳播

曾て阿母、西爾兩河の間に蕃殖せし阿利安人種の一部は、
今より凡そ四千年前の太古に、此故土を離れて、南印度河
沿岸の地に移住せしが、其人口次第に増加して、祭式の繁
褥となりしと、在來の土人の度羅毘陀と衝突せしと、此二
事情より移住民の中に、外に向うて戦争を世業とする刹

帝利種姓と、内に在りて祭事を世業とする波羅門種姓と
を生じ、自餘の大部は、農耕に、商賈に、すべて其身を實業に
委ね、又土人にして阿利安人種に服従せし者は、奴隸とな
りて賤役に就き、此の如くして阿利安人種が、恒河（今の恒
の流域を全く占領せし頃には、其國民中に左の如き四等
の種姓を生ぜり。

四種姓の
區別

種名	族籍	職	掌	人種
1 波羅門	僧族	祭祀を掌る	阿利安人種	阿利安人種
2 刹帝利	王族	軍國の事を掌る		
3 吠舍	平民	實業に従事す	非阿利安人種	非阿利安人種
4 首陀	奴隸	賤役に服す		

阿育王の
布教

第三回の
結集

近身に於りて
入りて又の我
を我に於りて
中印度に於ける佛
教

り。^(三)十六年^(三)是に於てアレキサンドルの部將にして、當時シ
リア王となりしゼリユクスは、印度に來りて笈多と戦ひ
しが、後其女を彼に妻はして和を講ぜり。是より笈多の勢
威、中北西三印度を壓せしが、其孫阿育王、^{阿輸迦}摩揭陀に君臨す
るに及んで、^(三)百九年^(九)厚く佛法に歸依し、内は國都に第三回
の結集を催し、當時摩揭陀の用語たりし巴梨語を以て佛
典を録し、外は宣教僧を諸外國に派遣して、偏に佛法の擴
張を圖りしかば、印度は固より西は大夏より、南は獅子國
^(今の錫)に至る迄、皆佛教の感化を仰ぐに至れり。

阿育王の死後、摩揭陀の國王の更立頻繁なりしが、其間に
案度羅王家南印度より來りて、遂に中印度を併吞せり。^(六)百

南北佛教
分裂の由
來

^(三)十五年^(十)是より先き、波羅門種姓は佛教の興起によりて、一大
痛打を受けしが、是に至りて漸く案度羅王家の保護を得、
佛教は之と共に、やゝ其勢を中印度に失へり。
釋迦の出世以前よりして、恒河以北の地には、非阿利安人
種多く割據し、河南は全く阿利安人種の占領に歸せしか
ば、佛教の恒河の南北に流布するに従ひ、勢ひ分離の傾向
を免れず。唯中印度に雄視せし摩揭陀國王が、佛教の保護
者となり、従うて恒河以南の地は、佛教流行の中心となり
しを以て、河北の佛徒は、常に河南の佛徒に屈服せられし
が、今や後者の振はざるを機とし、河北の佛徒は、頻に自派
の勢力を増進することを圖れり。

班超西域を定む

班超西域都護とな

域諸國を威服して、屢邊を擾し、かば、明帝遂に竇固等を
して、之を蒲類海天山南路のに破らしめ、巴爾庫勒又班超を
遣り、西域諸國と同盟して、北匈奴を挾撃せんことを圖ら
しむ。班超先づ于竇疏勒の諸國を招致し、其兵を併せて更
に焉耆、龜茲の諸國を撃破せしかば、西域五十餘國は、北匈
奴に背きて皆漢に降り。是に於て復西域都護府を龜茲
に開き、班超を以て之に任ぜり。(七百年)
西域諸國離叛してより、北匈奴の勢衰微せるに乗じ、漢將
竇憲大舉して之を撃破せしかば、(七十四年)其餘衆は遠く西
裏海の濱に遁れ去り、東胡の一種なる鮮卑は、東より移り、
代りて其地を占領せり。

北匈奴の滅亡と鮮卑の移轉

班超大秦に通せん

西域都護をやむ

絹布の販路

北匈奴は殆ど滅亡し、西域諸國は已に歸服し、漢威方に葱
嶺の東西に遍き時に當りて、羅馬帝國は頻に地を東に擴
めて、屢安息を破りしかば、班超は其富強を聞き、部將甘英
をやりて大秦に通ぜしむ。大秦は即ち羅馬なり。然れども
安息の爲に妨げられて意を果さず。(七十六年)尋で班超死し、
西域諸國並び叛きしかば、漢廷議して西域都護府を廢せ
り。(七十六年)然れども漢の威令一時西域に普及せし結果と
して、重要なる二大事變起れり。即ち海上絹布の交通と、佛教の
傳來となり。

(第一)海上の交通 支那は世界に於ける絹布の本産地に
して、其絹布は夙に支那以西の諸國民の手を経て、販路を

大秦王安敦支那に通ず

波斯、印度の市場に開きしが、アレキサンドルの東征以來は、更に歐洲に將來せられて、大に其嗜好に投ぜり。(ち絹布即は、支那音にて「セル」なるが故に、當時歐洲人は、支那を指して「セリカ」といふ。絹の産地の義なり。其國民を指して「セルス」といふ。絹商)然れども轉々諸國民の手を経るが故に、其價頗る不廉なりしを、東漢の初世より、羅馬帝國は頻に其領土を西方亞細亞に擴め、遂に波斯灣頭の地を取るに及んで、大秦王安敦は、海路使を發し、日南(今の交趾支那附近)を経て、東漢に通ぜり。(八百二)爾後三國の頃に至る迄、大秦の商人等多く日南交趾(東京地方)に來りて、貿易に従事せしが、西晋の末、支那に内亂相繼ぎ、加ふるに此等地方の支那官吏は、貨賂を貪り、重税を課せしを以て、外國貿易は遂に衰微せり。

佛法大月氏より支那に入る

(第二)佛法の傳來 西漢の頃より、佛法や、支那に傳はりしも、其流通盛ならざりしを、東漢の明帝の時、大月氏は佛法流行の中心たりしを以て、蔡愔(カイン)をやり、佛法を求めしむ。彼は大月氏より佛經と攝摩騰(カムヤ)竺法蘭(シウモウラン)の二僧とを得て歸り、洛陽に白馬寺を建てたり。(七百二)其後漢威西域に遍く、東西交通の路開くるに及んで、外國僧侶の印度、安息、康居、大月氏等より、海路或は陸路をとりて、支那に布教を試むる者多く、東漢の末年に至りて、佛法の感化は殆ど支那全土に普及せり。

外國の僧侶支那に來る

第九章 東漢の末路

東漢衰頹の由來

外元
官在
復す

外戚及宦者
の專權

光武帝明帝章帝三代の間は、東漢の國運頗る盛なりしも和帝年甫めて十歳にして、章帝の後を承くるに及んで、(七十四年)外戚漸く國政に干涉するに至れり。和帝以後東漢の諸帝は不幸にして短命多く、從うて幼主其後を承け、母后帝冲朝に臨みければ、外戚と宦者とは專權の機會を得、遂に東漢の滅亡を促せり。和帝より六傳して桓帝に至る。(八百年)此間六十年、外戚常に國政を擅にせしが、桓帝の時、外戚梁冀專横尤も甚だしかりしかば、桓帝は宦者單超と謀りて之を誅戮せしも、(九十年)宦者是より其功を負ひ、外戚に代りて朝廷に跋扈するに至れり。

東漢人士の氣風

東漢の黨錮

黃巾の賊

概を尙びしが、宦者國政を擅にするに及んで、當時の名士李膺、陳蕃等、大學の諸生を率ゐて、痛く之に反抗を試みしかば、宦者は桓帝に誣告して、名士二百餘人を捕へ、其終身を禁錮せり。之を東漢の黨錮といふ。(八十七年)宦者内に跋扈し、名士外に禁錮せられて、太平の望絶ゆると共に、叛亂四方に起る。就中張角は妖術を以て衆を誘ひ、亂を山東に起す。之を黃巾の賊といふ。(八四年)皇甫嵩一旦之を撃破せしも、其餘衆四方に出沒して鎮定を見ず。朝廷是に於て、重臣を出して地方を鎮壓せしめしより、遂に群雄割據の基を開けり。

桓帝より二傳して、章帝五世の孫なる帝辨位に即くに及

袁紹宦者を誅す

獻帝を挾みて西に遷る

群雄の割據

曹操獻帝を擁して群雄を征す

劉備と孫權

何れ之

六〇

んで、外戚何進は袁紹と謀り、四方の猛將を招きて、悉く宦者を族誅せり。(八百四十九年)是時董卓も亦宦者を誅するを名として京師に來り、遂に帝辨を廢し、其弟獻帝を擁立して、權威を專にせしが、袁紹に敗られ、帝を挾みて西長安に遷り、幾ならずして殺戮に遇ひ、其餘黨互に難を構へて、關中大に亂れしかば、獻帝は遁れて洛陽に歸れり。(八百五十六年)曩に獻帝の西に遷りてより、天下殆ど無政府の有様となり、群雄四方に割據す。袁紹は河北の地を占め、曹操は山東を有し、今の河南、安徽の地は、袁紹の從弟袁術の有に歸し、劉表は今の湖北に據り、孫堅は湖南に據りしが、袁術と袁紹とは、其門地、聲望を等しくせるを以て相善からず。袁紹

は劉表と結び、袁術は孫堅と結びて攻争を事とする門に、獨り曹操は窃に雄飛の機を伺ひ、獻帝の洛陽に歸るや、之を許(河南省開封府許州)に迎へ、天子を擁して天下に臨みしかば、其勢威頓に強大となり、袁術、袁紹を滅ぼし、更に當時内蒙古の東部一帶に跋扈せし、東胡の一種なる烏桓を擊破して、其地を奪ひ、更に南に向うて、劉表の子劉琮を降し、かば、江北の地は悉く曹操の有となれり。(八百六十八年)時に漢の疎族に劉備ありて、劉表に依りしが、劉琮、曹操に降るに及んで、謀臣諸葛亮は劉備に勸め、江を渡り孫權と共に曹操を防がしむ。孫權は孫堅の子にして、夙に江南を占領せしが、是に於て劉備を納れ、其將周瑜をして、大に曹

六一

西晋三國を一統す

八王の亂

孤立し、容易に司馬氏篡奪の地をなせり。司馬懿の子、司馬昭の時、鄧艾等をやり、蜀漢を襲うて之を滅ぼし、より、(九三年)其威望益高く、司馬炎其後を嗣ぐに及んで、遂に魏を篡りて帝位に即く。之を西晋の武帝といふ。(九百二年)武帝尋で兵を遣りて吳を滅ぼし、(九百四年)此の如くして西晋始めて天下を一統せり。杜預云、武帝の如くして西晋始めて天下を一統せり。

武帝天下を一統して後、魏の敗亡に懲り、子弟を要地に封じて、武帝の如くして西晋始めて天下を一統せり。帝室の藩屏となすに熱中し、反つて後年諸王跋扈の患を醸せり。武帝死し、(九百四年)子惠帝立ちしが、暗愚なりしかば、皇后賈氏朝政に干涉し、紀綱大に壞れたるに乗じ、汝南王亮、楚王瑋、趙王倫、齊王冏、河間王顒、成都王穎、長沙王乂、

西晋の滅亡と東晋の建國と

東海王越等兵を擧げ、各政權を擅にせんが爲に、相攻争するもの十六年、之を八王の亂といふ。是に於て晋室の藩屏全く壞れたり。殊に當時老莊の學大に行はれ、所謂清談俗談の反對にて世事以外の空理を談ずるをいふの風流行せしかば、天下の人士皆世事を放擲し、遂に一人の國家を憂ふる者なし。方に是時に際し、夷狄四方に起りて、頻に内地に逼りしかば、晋室大に覆り、僅に其餘喘を建業に保つに至れり。(九百七年)建業は洛陽の東南に當れるが故に、史家之を東晋といひ、以て西晋と別つ。而して江北一帶の地は爾來殆ど三百年間、塞外諸人種の占領に歸せり。

第十一章 塞外人種の侵入

塞外人種
侵入の由

匈奴人種
山西に彌
蔓す

兩漢の際、支那の疆域の廣大になると共に、塞外諸人種の徙りて、内地に來る者漸く多く、之につぎて東漢の末、三國の間、支那國內の擾亂甚しく、殊に西晋の武帝は、天下を一統して後、州郡の武備を撤去せしかば、彼等の塞内に移住する者益多きを加へ、就中匈奴、鮮卑、氐、羌最も強大なり。

(第二)匈奴 東漢の初め、南匈奴内降してより、其山西の塞内に入りて、漢人種と雜居する者、前後万部落に及びしが、歲月を経るに従ひ、戸口繁滋し、西晋の初に至りては、山西の地大半匈奴の占領する所となれり。

(第二)鮮卑 鮮卑は古の東胡の一種なり。東胡の匈奴に撃破せらるゝや、其餘衆烏桓山(内蒙古阿魯科)に走りしを烏

烏桓と鮮卑

氏、羌人種
關中に
彌蔓す

桓部となし、鮮卑山(内蒙古科爾沁部の西)に走りしを鮮卑部となす。東漢の世、北匈奴の滅亡するや、烏桓と鮮卑とは東より徙りて其地を占領せしが、烏桓は後曹操の爲に征服せられて衰微せしも、鮮卑は其勢日に強大となり、東は滿州より、西は河西に至るまで、支那北邊一帶の地を奄有せり。

(第三)氐及羌 氐、羌共に圖伯特人種に屬し、羌はもと青海附近に生息し、氐は巴蜀の間に散在せしが、東漢の世に、關中、河東の地に移住する者頗る多く、三國、西晋の際に至りては、氐、羌種族の關中に存る者、殆ど漢人種と相半するに至れり。

西晋の時、塞外諸族の内地に雜居する者、此の如く多かり

匈奴の劉淵帝を稱す

しが、八王の亂起るや、匈奴の酋劉淵先づ亂を山西に起こし、(九百六十四年)尋で帝位に平陽(山西省平陽府)に即き、國號を漢と稱す。(漢は漢朝の漢)
(九百六十八年)劉淵の子劉聰嗣ぐに及んで、一族劉曜及匈奴の別種(種)の羯人なる石勒等をして、連に西晋を攻めしむ。西晋は惠帝の後、懷帝、愍帝の二主相繼ぎて帝位に即きしも、皆漢軍の囚ふる所となりしかば、司馬懿の曾孫なる司馬睿は、位に建業に即き、僅に江南の地を保つ。之を東晋の元帝といふ。(九百七十七年)

前趙と後趙と

漢は一時江北一帯を占領せしも、劉聰の死後内亂起り、劉曜は長安に自立して國を前趙と號し、石勒も亦襄國(直隸省順德府邢臺縣)に自立して國を後趙と號し、劉曜と相争ひ、石勒遂

後趙の分裂

に勝ちて江北を統一せしが、(九百八十八年)其死後幾ならずして復内亂起りしかば、氏酋苻健は關中に自立して前秦王と稱し、漢人張重華は河西に據りて前涼王と稱し、後趙の領土は分裂して、群雄割據の區となれり。

前燕の建國

是より先き、鮮卑の慕容部は、遼西遼東を併せて勢日に強大となりしが、慕容皝部(部)となるに及んで、棘城(盛京省錦州府義州)に據り、國を前燕と號せり。(九百七十九年)子慕容儁(儁)嗣ぎ、後趙の内亂に乗じて悉く河北の地を奪ひ、(九百八十二年)尋で都を鄴(河南省彰德府臨漳縣)に移せり。

第十一章 五胡の興亡及東晋の盛衰

東晋初世の形勢

七〇

東晋の元帝の位に建業に即くや、王導に國政を任じ、其從兄王敦に軍事を委ねしより、王氏の勢日に強く、王敦は遂に異志を抱きて、兵を武昌(湖北省武昌府)に擧げたり。(九百八年)其亂幸に鎮定せしも、尋で蘇峻の叛あり。かく内に反亂相繼ぎしを以て、未だ江北の恢復に従ふ能はざりしが、桓温軍事を統ぶるに及び、始めて北伐の軍を起し、先づ巴蜀の地を恢復せり。(千七年) 歴陽 謝石、謝元

匈奴の劉淵兵を起こし、時、氏曾李雄も亦叛旗を巴蜀の地に翻へし。(九百六年)國號を成と稱し、尋で漢と改めしが、其從子李勢立つに及んで、淫虐にして人心離畔せしかば、桓温は一舉して之を滅ぼし、勢に乗じて中原を恢復せんと

桓温巴蜀を定む

恢復せり。(千七年)

歴陽 謝石、謝元

桓温更に前秦前燕を伐つ

桓温更に前秦前燕を伐つ

欲し、後趙亡びて、江北の群雄相攻争せるを機とし、先づ前秦を關中に伐ちしが、(千四年)功なくして兵を收め、更に前燕に嚮ふ。時に慕容儁の子慕容暉位に在りしが、其叔父慕容垂大に桓温の軍を枋頭(河南省滎縣)に破りしかば、桓温遂に南に歸れり。(千九年)是に於て慕容垂の威名日に盛となり、慕容暉之を疎外しければ、彼は前秦に降れり。

前秦の符堅江北を一統す

是時苻健の從子孫苻堅前秦に王たりしが、慕容垂來奔するに、及んで王猛をやり、鄴を襲うて前燕を滅ぼし、(千三年)尋で前凉を河西に伐ちて、其都城姑臧(甘肅省涼州府)を陥れ、(千六年)更に呂光に命じ、焉耆龜茲以下の西域諸國を平定せしむ。是に於て江北の地を擧げて苻堅の有に歸し、東は高句麗、新羅よ

七一

泗水の戦

り、西は葱嶺に至るまで、塞外の六十餘國悉く前秦に來貢せしかば、苻堅は江南を併せて、天下を一統せんと欲し、遂に百万の大軍を發して、江淮の地を侵し、（三十四年）反つて晋將謝玄の爲に泗水（安徽省鳳陽府壽州）に大敗し、（三十四年）僅に身を以て免れしも、尋て叛者の手に斃れ、幾ならずして前秦滅亡せり。（四十五年）

屋戸 魏 漢 三朝

前秦の滅亡と群雄の割據

苻堅の江北を一統するや、鮮卑、西羌諸族の其朝に仕へし者頗る多かりしが、一旦敗亡するに及び、皆背き去りて一方に割據す。鮮卑の慕容垂は中山（直隸省定州）に據りて後燕國を建て、（四十四年）羌酋姚萇は、長安に據りて後秦國を建て、（四十四年）鮮卑の乞伏國仁は、西秦國を隴西に建て、（四十四年）鮮卑

三國魏と割據す

後魏の道武帝

の拓跋珪も亦、盛樂（山西省歸化城南）に據りて國を後魏と號し、（四十六年）氏酋呂光は、河西に後凉國を建つ。呂光は曩に苻堅の命を承けて、西征の途に就きしが、其敗亡を聞くや、遂に姑臧に自立せり。（四十六年）其他鮮卑の秃髮烏孤は、青海の地に南凉國を建て、（四十五年）匈奴の沮渠蒙遜は、張掖（甘肅省甘州府）に據りて北凉國を建て、（四十五年）漢人李暠は、其西燉煌に據りて西凉國を建つ。（四十六年）是に於て當時群雄の江北に割據する者凡そ八國、就中後魏最も強大にして、連に後燕を破ぶり、拓跋珪遂に帝位に平城（山西省大同府）に即く。（四十五年）之を後魏の道武帝となす。

後燕の敗るゝや、其餘衆龍城（內蒙古土默特右翼の西）に走りしが、漢人

劉裕の北伐

東晋の滅亡

後魏の太武帝江北一統す

馮跋其衆を服して北燕國を建つ。(千九百六十)時に慕容垂の弟慕容徳も亦別に山東の地に南燕國を建て、(千八百五十)屢南して東晋を侵し、かば、晋將劉裕遂に之を滅ぼせり。(千七百七十)是より先き匈奴の赫連勃勃、朔方に據りて國を夏と號し、(千六百十七)連に後秦を苦しむるを機とし、劉裕は更に西關中に入りて後秦を滅ぼせり。(千七百七十)劉裕もと篡奪の大志を懷きければ、今や其北伐の功を負うて南に歸り、遂に東晋の祚を移して帝位に建康(即ち建業)に即く。之を宋の武帝となす。(千七百九十)晋は東西合せて百五十六年にして亡べり。後魏は道武帝の孫、太武帝位に即き、(千八百四十)勇畧あり。先づ夏を關中に代つ。後秦滅び、劉裕南に還りてより、夏は悉く

南朝及北朝

五胡十六國

關中を占領し、尋で西秦を併はす。西秦は曩に南涼を滅ぼし、が故に、(千七百四十)關中隴西一帶の地は、悉く夏の版圖に歸し、國勢日に盛なりしが、是に至りて後魏に滅ぼされたり。(千九百九十)太武帝は尋で北燕を滅ぼし、(千九百六十)又北涼を降だす。(千九百九十)而して北涼は已に西涼を滅ぼして、(千八百八十)河西の地を一統せしが故に、今や北涼の亡ぶると共に、江北の地は全然後魏に歸し、支那本部は分れて南北兩大國となる。江北を北朝とし、江南を南朝と稱せり。西晋の末より、江北の地、塞外諸人種の蹂躪する所となること斯に百卅年、其間大國の興亡せし者十六國、人種を以てせば五種、故に之を總稱して五胡十六國といふ。

せしかば、(七百年)東は高句麗より、西は波斯の諸國に至るまで、皆後魏に朝貢せり。

南朝は宋の武帝の後、子文帝嗣ぎ、後魏の柔然と争ふに乗じて北伐せしも、反つて大敗し、(十百年)江北の地は概ね後魏に歸し、後魏の國勢益強大を加ふ。太武帝の後、賢主輩出せしが、後魏はもと夷狄より起りて、其國俗野鄙なりしかば、太武帝の玄孫、孝文帝位に即くに及んで、(一千年卅)或は舊都平城を洛陽に遷し、(十三年五)朝廷の儀式は一切支那の國風により、本國の衣服言語を用ゆるを嚴禁し、或は皇族を始め、本國の臣民をして、漢人種と雜婚するを獎勵して、銳意之が改革を圖れり。然れども國人は其舊風を慕ひ、改革を

後魏の孝文帝の改革

悦ばずして、漸く離叛の心を抱き、加之是より華侈柔弱の風行はれて、國勢も亦初めて衰微せり。

後魏の衰亂

孝文帝の孫、孝明帝位に即くや、(千七百年)其母胡太后政を攝し、淫亂にして嬖臣多く、遂に帝を憚りて之を毒弑せしが、胡太后も亦尋で臣下の弑する所となれり。高歡内亂を靖め、新に孝文帝の曾孫孝武帝を擁立せしも、其功を負うて專横なりしかば、孝武帝は長安に出奔し、宇文泰に依りて高歡を伐つ。高歡も亦孝文帝の曾孫、孝靜帝を洛陽に立てて之を拒ぐ。是に於て後魏は分れて東西となり、(千九百年)東魏、西魏の國名は尙ほ存すれども、其實權は全く高歡、宇文泰の手に歸せり。

高歡と宇文泰と

後魏の分裂

南朝の變遷

ハ名佛ノ擇字カニナリシハナキ

侯景の反亂

高歡死し、子高澄嗣ぎて東魏の政を執るに及んで、河南の鎮將侯景は其地を以て南朝に降れり。(千二百七年)南朝は宋の文帝より傳へて、其孫順帝に至りしが、權臣蕭道成之を廢して自から帝位に即く。(千二百九年)之を齊の高帝といふ。然れども其從孫和帝の時、疎族蕭衍は禪を受けて帝位に即く。(千二百六年)之を梁の武帝といふ。武帝は侯景の來降を納れて東魏を代ちしが、尋で又之と和せしかば、侯景は其反覆を怨みて直に建康を襲ふ。(千二百八年)當時梁は上下佛法に心酔して、武備を顧みざりしかば、國內忽ち解崩し、武帝は憂憤して死し、侯景遂に帝を稱せり。(千二百一十一年)時に武帝の子蕭繹、武帝の孫蕭簪、其弟蕭綸等、所在に兵を

東魏亡び北齊興る

四子運り

後梁

梁亡び陳興る

起し、も、各權を争うて一致せず。蕭繹遂に蕭綸と蕭簪とを逐ひ、陳霸先等をして侯景を誅せしめ、位に江陵(湖北省荆州府)に即く。(千二百一十二年)之を元帝となす。東魏は高澄の後、弟高洋國政を執りしが、遂に篡立して帝位に即く。(千二百一十年)之を北齊の文宣帝となす。文宣帝は蕭綸を納れて、連に梁の江淮の地を畧し、西魏の宇文泰も亦、蕭簪を助けて、梁を侵し、遂に元帝を殺し、蕭簪を立て、梁王となし、今の湖北の地を領せしむ。(千二百一十五年)之を後梁の宣帝といふ。實は西魏の一藩屏のみ。元帝の死するや、陳霸先は其子、敬帝を建康に擁立して、江南の地を保ちしが、尋で之を廢し、自立して帝位に即く。(千二百一十一年)

西魏亡び北周興る

隋の文帝天下を統一す

七年)之を陳の武帝といふ。是時宇文泰死し、子宇文覺嗣ぎて西魏の禪を受く、之を北周の孝閔帝となす。是に於て陳北周、北齊、後梁の四國天下を分領することゝなれり。北周は孝閔帝の後、弟文帝繼ぎて勇畧あり。北齊の内亂あるに乗じて之を滅ぼし、(千二百廿七年)其死後幾ならずして外戚楊堅國政を統べ、遂に北周を簞うて帝位に即く。(千二百一十二年)之を隋の文帝といふ。文帝先づ後梁を降し、尋で陳を滅ぼして天下を一統せり。(千二百四十九年)南北朝相對立すること、斯に凡そ百五十年なり。

第十四章 隋の盛衰及唐の初世

楊帝大に土木を興す

煬帝又外征を企つ

隋の文帝位に即きて、或は學校を興し、或は刑法を更定し、或は賦税を輕減し、専ら意を國治に注ぎしが、子煬帝之を弑して位に即く。(千二百六十年)煬帝性豪華にして、内は盛に土木を興し、外は屢遠征を企てり。
(第一)土木 煬帝は長安を西京とし、洛陽を東都となし、大に其都城、宮殿を營み、又所在に離宮をおきて、巡遊に備へ尋で通濟渠(黃河より淮水に至る)、刊溝(淮水より揚子江に至る)、永濟渠(今の衛河に於て)、河(今の衛河に於て)より天、江南河(楊子江より杭州に至る)、津(今の浙江より運河なり)を開きて、江南と河北との水路を通じ、其他盛に土木を興し、かば、丁男給せずして、婦女を使役するに至れり。

(第二)外征 當時西域四十餘國の商賈、河西に來りて貿易

煬帝高句麗を伐つて大敗す

せしかば、煬帝は頻に彼等の入朝を促がして、國の富強を誇示し、又南は林邑（今の交趾支那の一部）を伐ちて赤土（今の暹羅の一部）に通じ、東は流求（今の臺灣）を降し、（七十二年）西は當時青海附近に蕃殖せし鮮卑の餘裔の吐谷渾を破れり。かくて隋の國威四方に振ひしかば、我國も亦使を派して初めて通交せり。（二百六十八年）唯高句麗朝貢せざりしかば、煬帝自から將として鴨綠江に至りしも大敗し、（二百七十二年）尋で大軍を發して遼東を攻めしも、復克たずして還れり。

征伐に土木に、天下其負擔に苦みしが、帝の遼東に大敗するに及んで、叛亂四方に起り、李密は河南を畧せしが、後王世充之を滅ぼして洛陽に據り、竇建德は河北に據り、其他

群雄の割據

唐天下を一統す

貞觀政要

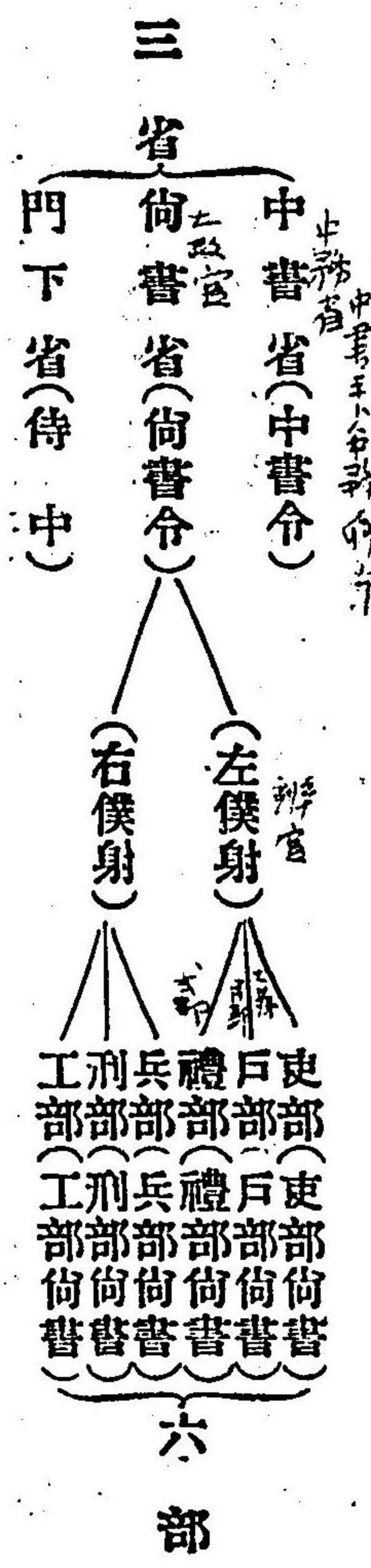
の群雄所在に割據せり。李淵も亦其子、李世民と共に、兵を擧げて長安に入り、遂に帝位に即く。（二百七十八年）之を唐の高祖となす。是時煬帝は江都（江蘇省揚州府）に在りて、已に反者に弑せられしかば、高祖は李世民をやり、王世充、竇建德以下の群雄を平定して天下を一統し、幾ならずして位を李世民に傳ふ。（二百七十八年）之を太宗といふ。
太宗位に即くに及んで、杜如晦、房玄齡等朝政を統べ、李勣、李靖等軍事を掌どりしかば、國威外に揚がり、太平内に興れり。加之唐の諸制度も亦多く此時代に定まり、而して此等の諸制度は、支那歴代の模範となりしのみならず、我國及朝鮮の制度も亦、之に參酌せし所極めて多ければ、今左

○ 唐代の中央政府の官制

上三師三公アリテ天子の師ヲシテ下ニ之ヲ命ズルヲ司ス
 三公三公アリテ天子の師ヲシテ下ニ之ヲ命ズルヲ司ス
 三公三公アリテ天子の師ヲシテ下ニ之ヲ命ズルヲ司ス
 三公三公アリテ天子の師ヲシテ下ニ之ヲ命ズルヲ司ス

に其大畧を述ぶべし。

唐の中央政府には、上に三省ありて天下の大政を統べ、其下に六部ありて行政事務を分擔せり。三省とは尙書門下、中書をいふ。中書省は天子の詔敕を宣奉することを掌り、其長を中書令といふ。門下省は其詔敕を審査することを経、已に確定せる詔敕を天下に施行することを経る。其長を尙書令といひ、其副に左右兩僕射あり。左僕射は吏、戸、禮の三部を統べ、右僕射は兵、刑、工の三部を統ぶ。吏部は官吏の黜陟を掌り、戸部は賦税の事を、禮部は禮儀の事を、兵部は兵備の事を、刑部は刑罰の事を、工部は百工の事を掌る。之を合せて六部といひ、六部の長官を尙書といふ。三尙書は一僕射に隸し、兩僕射は尙書令に副となり、此の如くして天下の行政事務を尙書省に統べたり。今其關係を圖に示さば左の如し。



地方の官制

地方の官制は、天下を十道(關内、河南、河東、河北、山南、淮南、江南、劔南、嶺南)に分ち、道の下に州あり。州の下に縣あり。縣に令をおき、州に刺史をおき、以て其地方を治めしめ、道毎に巡察使をおきて、州郡を督察せしめたり。

南北朝の
際大に門
閥を尙ぶ

(第二)官吏登庸法 上古周の世には郷舉、里選の法ありて、才徳ある者は、其郷里より之を朝廷に選舉して官吏となし、兩漢の時は、天子親しく天下の賢良の士を策問し、其對策の結果に應じて、官職を授くるを常とせしが、尙ほ周代の舊により、盛名天下に聞ゆる者は、對策を用ゐずして官吏に登庸せり。然るに東漢の末、天下の處士虚名を竊む者漸く多かりしかば、三國の時、魏は各地方に中正と稱する官をおき、郷評に本づきて、其地方の人物を次第して九品となさしめ、朝廷は其品第によりて官吏を登庸せしが、其後中正の愛憎漸く甚しく、上品は必ず名門に限り、従うて門閥を尙ぶの風漸く盛となり、天下の人士は徒に勢家と

唐の官吏
登庸試験
法

周禮
三禮
禮記

三傳
春秋
左傳
公羊傳
穀梁傳

姻親を結ぶことを力めて、遂に學業を顧みざるに至りければ、隋の時、九品中正の官を廢し、新に進士の科を開けり。科擧ノ法トス
(千二百六)唐の制度は、大略隋に本づき、京師及地方の學校出身者を生徒といひ、州縣の試験に及第せし者を郷貢といふ。歲毎に生徒郷貢を尙書省に會して之を考試し、合格者に官を授く。之を進士といふ。爾後多少の損益あれども、支那の官吏登庸法は、大抵此法を慣用せり。而して考試の課目は、主として經義と時務策とに在り。時務策とは時事の得失を論ぜしめ、經義とは五經(易、詩、書、三)の義理を問ふなり。制擧アリテ、命令言テ擧グ特別任(用)ス。義理傳
抑、秦の燒書の後を承けたる兩漢の學者は、専ら古書の註

新羅及百濟我が保護國とな

高句麗百濟の同盟と新羅の孤立と

新羅好を隋、唐に通ず

百濟及高句麗の滅亡

其地最も我國に近くして、屢我九州の叛民を煽動しければ、神功皇后遂に之を征服せり。時に百濟は高句麗の侵畧を被りしかば、亦朝貢して我保護を仰げり。是に於て我國は、辨韓の故地に任那府を開きて、新羅百濟を保護國となせしが、唯高句麗は其勢を負うて我國に服せず。殊に朱蒙十二世の孫なる長壽王立つに及び、(千二百七)都を平壤に奠めて、頻に百濟を撃破せり。已にして新羅も亦高句麗に通じて百濟を侵畧し、又我國に叛きて任那府を陥れたり。(千二百廿)我繼體、欽明兩天皇の時、屢新羅を征せしも、遂に成功なく、新羅の國勢日に興りしかば、高句麗も遂に其強大を恐れて百濟と黨し、更に我國を連ねて新羅を討滅せんことを圖れり。

とを圖れり。

是時隋已に南北朝を一統して、外國經畧を企てしかば、新羅は頻に好を隋に通じ、隋の煬帝は爲に高句麗を侵撃して大敗せり。隋亡び唐興るに及んで、新羅は新に其保護を乞ふ。是に於て唐の太宗は陸路高句麗を親征して復大敗せしが、(千三百)高宗の時、蘇定方をして海軍を率ゐ、新羅と協力して百濟を伐たしむ。我齊明天皇筑紫に幸して百濟に應援せしも、唐軍の爲に破られ、百濟遂に滅亡せり。(千三百廿三)

唐は尋で又高句麗に内亂あるを機として之を滅ぼし、(千三百廿八)其都城平壤に安東都護府を開きしが、幾ならずして

新羅朝鮮
半島を併
す

我國と隋
唐との交
通

聖代の南
リテ辰韓ト

新羅は高句麗の餘衆を使喚して亂を起さしめ、遂に平壤を陥る。(千三百卅五年)然れども唐は高宗の死後、内亂多くして力を外事に專にする能はざりしかば、安東都護府を遼東に移し、朝鮮半島は新羅の占領に任かせり。

百濟、新羅の我國に歸服してより、儒學、佛法の次第に我國に將來せられしのみならず、當時朝鮮に來住せし漢人の我國に歸化する者多かりしかば、我國は彼等を介して支那に通ぜしめ、其紡織、工藝を傳へて大に我國の文化を進めしが、隋唐の際、支那と朝鮮との關係頻繁を加ふると共に、我國と支那との交通も亦頓に盛大となる。我推古天皇の時、小野妹子をして隋に通ぜしめ、(千二百六十八年)唐興るに及

我國の僧
侶學生多
く唐に入
る

聖代の南
リテ辰韓ト

突厥の興
起と柔然
の滅亡と

んで歷朝遣唐使をおき、頻に使聘を通じて其文物を將來せり。當時我僧侶、學生の唐に留學する者頗る多く、最澄(傳教大師)、空海(弘法大師)等入唐して佛法を傳へ、吉備眞備、安倍仲麿等入唐して儒學を修めしが、唐の衰ふるや、菅原道眞は宇多天皇に奏して遣唐使を止めしより、(千五百五十四年)兩國國際上の交通は、一旦斯に中絶せり。

(第二)突厥との關係 後魏の太武帝の北征以來、柔然の勢大に衰へしが、皇紀千百七十年の頃、太檀(太檀)五世の孫なる醜奴、及其弟頭兵相續ぎて柔然の可汗となるに及んで、大に國勢を恢復し、後魏の東西に分かれて相攻争せるに乗じ、屢北邊に入寇せり。已にして當時金山(阿爾泰山)附近を占領し

嚙嚙の興

突厥東西
兩部に分
かる

て柔然の一屬部なりし突厥の部長土門は事を以て柔然に背き其子木杆可汗の時遂に柔然を滅ぼして其地を併せ(千二百年)尋で西に向うて嚙嚙部を伐つ。

皇紀千五十年の頃笈多王家中印度の曲女城(今の「カ」)に興り案度羅王家に代りて印度に號令し又大月氏を北印度より驅逐せり此の如くして大月氏の衰ふると共に金山の西邊に散在せし土耳其人種の嚙嚙部は南下して中央亞細亞を占領し(千百年前後)復笈多王家を破りて北印度を畧し更に西波斯に侵入して歲幣を納めしめ又天山南路の諸國をも羈屬して國威日に盛なりしが遂に突厥に滅ぼされ(千二百年頃)突厥の領土は内外蒙古より天山南北兩路を

經て中央亞細亞に及べり是に於て木杆可汗は自から都斤山(杭愛山附近)に居りて東方を統べ從弟達頭可汗をして千泉(塔斯河附近)に居りて西方を統べしむ突厥是より東西兩部に分かれたり。

東突厥は連歲支那の北邊に入寇して北周及隋を苦めしが唐の初め木杆可汗の曾孫頡利可汗東突厥を統領するに及んで暴戾にして且其從子突利可汗と争を起し、かば、部落漸く分裂して國勢振はず之に乗じて鐵勒諸部も亦離叛せり。

鐵勒部は當時獨樂(今土拉)河の附近に蔓延せし土耳其人種にして其部族甚だ多く就中薛延陀回紇の二部尤も強し

東突厥の
滅亡と回
紇部の興
起

高昌國の
滅亡

從來東突厥に臣服せしが、頡利可汗の暴戾を厭ひ、叛きて唐に通ず。太宗は李靖、李勣をやり、之と東突厥を夾撃して、遂に之を滅ぼせり。(千二百九十年)是に於て東突厥の舊土は、概ね鐵勒諸部の占領に歸し、薛延陀部は一時之を統領せしが、幾ならずして回紇部は薛延陀部を斃し、鐵勒諸部を率ゐて唐に歸服せり。(千三百六十年)唐已に東突厥を滅ぼし、更に高昌國(今の吐魯番附近)を伐つ。高昌國は天山の東端に在りて西突厥に臣服し、屢西域諸國の唐に來貢するものを妨げしかば、太宗は侯君集をして之を討滅せしむ。(千三百百年)是に於て唐の領土は、直に西突厥と相接するに至れり。

337057

西突厥の
滅亡

吐蕃と唐
との和戦

西突厥は達頭可汗の孫、統葉護可汗の時、波斯を征服して其保護國となし、國勢益強盛なりしが、其晩年より内亂起り、更に東西兩部に分かれて相攻争し、國力大に疲弊せるを機とし、高宗一旦之を征服せしが、(千三百十七年)尋で其餘衆吐蕃に應じて、天山南路を擾し、かば、高宗は裴行儉をやり復之を平定せしめたり。(千三百四十年)
(第三)吐蕃及印度との關係 吐蕃は即ち圖伯特なり。其國山岳多くして、古來支那と交通せざりしが、棄宗弄贊其國王となるに及んで(千二百九十年前後)英畧あり。内は大に佛法を奨め、外は頻に領土を擴め、遂に黨項、吐谷渾の二部を青海附近に撃つ。二部共に唐の保護を仰ぎしかば、斯に唐と吐蕃

超日王と
戒日王と

どの争起り、互に勝敗ありしが、吐蕃遂に和を唐に請へり。
(千三百)吐蕃の南境は、泥婆羅を経て、中印度に通ずるが故
に、唐と印度との交通も亦是より頻繁を加へたり。
印度は皇紀千八百九十年の頃、中印度、鄔闍衍那に超日王興
り、漸く嚙嚙種族を國外に攘ひ、遂に西北中、三印度を一統
して、大に文學を奨励せしが、其後千二百七八十年の頃、戒
日王は曲女城に據りて殆ど全印度に號令し、亦大に文學
を奨め、且佛法を興し、かば、詩人、學者、高僧多く其朝に集
り、印度の近世文學は、此間に在りて尤も發達せり。
戒日王は唐の太宗と時を同くせしが、太宗已に東突厥を
滅ぼし、吐蕃を服し、唐の威勢四隣に振ふに及んで始めて

印度の諸
侯唐に通
ず

ラヂャ
ト種族
の興起

佛敎衰へ
温都敎起
る

使を唐に通ぜしかば、(千三百)太宗も亦王玄策をやり其國
に使せしむ。(千三百)時に戒日王正に死し、權臣阿羅那順自
立して王玄策を拒む。王玄策は吐蕃、泥婆羅の兵を募りて
之を擒にせしより、印度の諸侯等大に恐れ、前後唐に朝貢
せり。

戒日王の後、諸侯復各方に割據して相攻争する間に、ラヂャ
フト種族西印度より崛起せり。此種族はもと大月氏、嚙嚙
等の外來人種と、印度阿利安人種との間に生ぜし雜種に
して、次第に其勢力を増進せしが、當時印度には文學の再
興と共に、古典の研究盛となり、従うて波羅門敎徒は愈其
勢を恢復し、遂に波羅門敎を改良して温都敎を興こし、頻

に佛教を排撃せしかば、ラヂャプト種族は温都教を崇奉して其歡心を買ひ、此の如くして皇紀千四百年乃至千六百年の間に、ラヂャプト種族は印度西半部の覇權を握り、温都教は佛教に代りて印度の國教となれり。

オシロイ
オシロイ
オシロイ

大食國の
興起と波
斯の滅亡

(第四)中央亞細亞との關係 東漢の末、安息國の衰微せるに乘じ、波斯人アルタクセルクセス之を滅ぼして波斯國を再興し、(八百八十六年)國勢日に強大となる。後一時嚙嚙又は西突厥の侵畧に苦しみしも、よく國命を維持せしが、大食(シリア)地方の阿刺比人を指せし(の侵撃を受くるに及んが後「サラセン」帝國をも云へり)の侵撃を仰ぎしも、其地は遂に國王卑路斯連に敗れ、唐の保護を仰ぎしも、其地は遂に摩訶末教徒に占領せられて、波斯は斯に滅亡せり。

大食國唐
に通ず

大食國の
極盛

摩訶末教の祖師摩訶末は、皇紀千二百七十年の頃始めて一新教を唱へ、宗教の勢を借り、阿刺比亞を統一して所謂大食國を興ふしが、其後嗣よく遺志を紹ぎて新宗教の擴張に従事し、哈利發(敎皇の繼嗣をいふ)オスマンの時、遂に波斯を併吞せり。大食固より唐の威名を聞き、其波斯を保護せんことを恐れしかば、オスマン以來頻に好を通じて其歡心を買ひしが、高宗の後、唐の衰微せしを機として天山南路を侵し、(七十三百)又印度にラヂャプト種族と印度阿利安人種と相争ひ、佛教徒と温都教徒と相争ふに乘じて、印度河沿岸の地を畧せり。(千三百一十一年)要するに皇紀千三百年代の後半は、大食の極盛期にして

葱嶺以西の地は全く其占領に歸し、此新領土の住民は皆摩訶末教（多摩末教）に改宗せしより、中央亞細亞に於ける佛教先づ衰へ、天山南路の佛教も亦漸く其勢を失ふに至れり。

第十六章 唐の極盛

太宗、高宗の世、唐は主として其力を東北、西の三面に用ゐ、南方を經營せざりしも、其國威加はるに従ひ、占婆（交趾附近）、真臘（今の暹羅）、閩婆（瓜哇）、室利佛逝（今の蘇馬塔）等の南海諸國皆來貢せしかば、唐の政令の及ぶ所、東は朝鮮、滿州より、北は内外蒙古を併せ、西は天山南北兩路より、中央亞細亞を包み、南は後印度諸國を羈屬せり。唐は此廣大なる

南海諸國に朝貢す

領土を治めんが爲に、塞外に六都護府を建て、其下に都督府と州とをおけり。州に刺史あり。都督府に都督あり。刺史と都督とは多く在來の部長、族酋を之に任じ、都護は特に朝廷より派遣せられて、所部の刺史、都督を統ぶ。六都護府の所在及所轄區域は左の如し。

六都護府

都護府	所	地	所轄區域
I 安東	初め朝鮮の平壤に治し、後、遼東城に移る	滿州	及朝鮮
2 安北	初め都斤山の南に治し、後、陰山の麓に移る	外蒙	蒙古
3 單于	山西省大同府の西北なる雲中城に治す	内蒙	蒙古
4 北庭	天山北路の庭州に治す、今の迪化府なり	天山北路	路
5 安西	天山南路の龜茲に治す、今の庫車なり	天山南路及中央亞細亞	路
6 安南	嶺南の交州に治す、今の東京の河内なり	南海諸國	國

唐は空前の一大帝國を建設せしが故に、従うて當時海陸

陸路東西の交通

兩路に於ける東西兩洋の交通も亦頗る頻繁を加へたり。』
〔第一〕陸路 隋の時より河西の地は、東西交易の中心となり、西域諸國の商人多く其地に來集せしが、唐興りて中央亞細亞、天山南路の通路開くると共に、西域の商人の來集愈増加し、漢人にして波斯、印度地方に通商せし者も亦尠からず。殊に大食國の勢を得るや、阿剌比人は次第に其通商の範圍を擴め、陸路殊に海路に於て、當時の世界の商權を掌握せり。

海路の交通

〔第二〕海路 兩漢、三國時代に、羅馬の商船は印度洋の航海權を專有せしが、佛教の東漸して、支那と南洋との通路開くるに従ひ、支那の海運漸く興り、隋唐の初世に至りて、支

阿剌比人支那に通商す

那の商船は、南洋、錫崙を經、遠く波斯灣内に入りて交易に従事せり。其後大食國興り、波斯灣内及印度河口の諸港を占領するに及んで、阿剌比人は次第に其航路を擴張し、遂に漢人に代りて印度洋の航海權を占め、皇紀千三百五十年以後は、彼等の南洋を經て、廣州(廣東省)、泉州(福建省)、杭州(浙江省)の諸港に通商する者頗る多く、唐は此等の諸港に、提舉市舶なる官をおき、海關稅を徵收して、歲入の一大稅源となせり。

要するに唐代二百五十年間は、陸路殊に海路に於て、東西兩洋の交通頗る盛大を極めしが、其後大食の國勢振はず、支那も亦内亂多く、此等内外の事情の爲め、次第に衰微を

免れざるに至れり。

東西の交通盛大となるに従ひ、當時中央亞細亞に流行せ

し諸宗教は、前後支那に將來せられたり。

(第一) 祆教 祆教は皇紀第一世紀の初バクトリアの蘇魯

支が創唱せし蘇魯支教なり。其教たる火を神聖視するが

故に、之を拜火教といひ、又太陽を拜するが故に祆教(祭天

といふ)ともいふ。夙に波斯の國教となりしが、波斯滅亡の時、

祆教徒は摩訶末教徒に虐待せられて東方に移住し、其教

漸く唐に流傳せり。

(第二) 摩尼教 摩尼教は皇紀八百八十年の頃、波斯人摩尼

の創唱に係り、夙に回紇人の歸依を得しが、唐の中世以後

祆教即拜火教

摩尼教と回紇人と

回紇人といふ
摩尼教といふ
波斯人といふ
蘇魯支教といふ
バクトリアといふ
バクトリアといふ

回紇人多く塞内に移住せしかば、其教又多少支那内地に流行せり。

(第三) 景教 景教(景は光輝の義其教義の光輝發揚の謂なり)は皇紀千百年の頃、

ネストリウスの創唱せし耶蘇教の一新派にして、波斯中

央亞細亞に流行せしが、唐の太宗の時、波斯人阿羅本其經

典を將來せしより、(千二百九十八年)漸く支那に流行し、太宗、玄宗

等も亦之を尊信して、爲に其寺院の建設を獎勵せり。

(第四) 回教 回教は摩訶末教なり。後世回紇人の崇奉する

所となりしが故に回教といふ。大食國の勢を得ると共に、

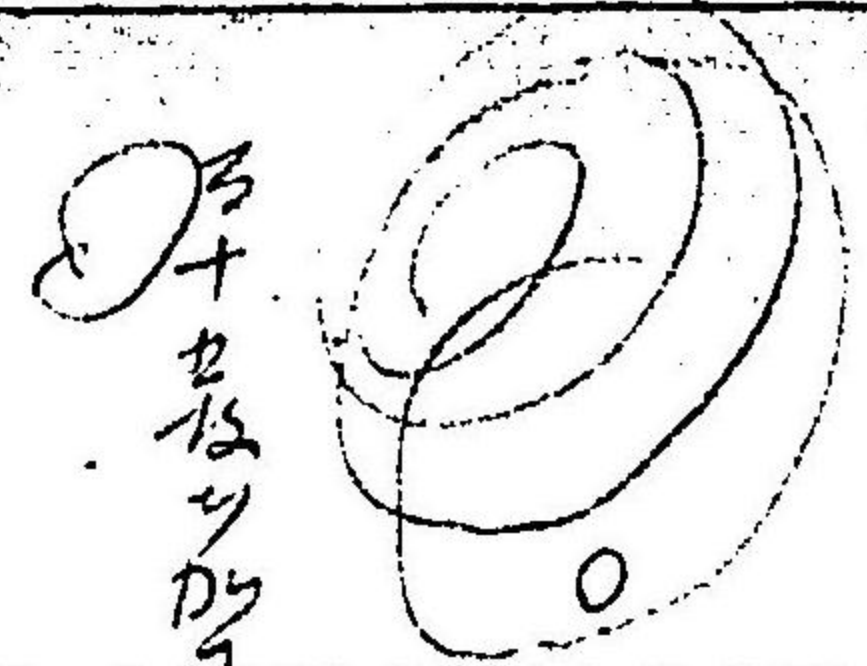
天山南路を経て、支那に將來せられたり。

(第五) 佛教 漢代に東漸せし佛教は、此等諸外教の傳來に

阿羅本其教を傳ふ

回教

佛教の隆盛



法顯、義淨の渡天

法顯、義淨の渡天

よりて、毫も其勢力を失はざるのみならず、魏、晋、南北朝を
經、唐に至りて實に其隆盛を極めたり。其主要なる原因は
左の如し。

- (1) 東晋以來、印度及中央亞細亞地方の佛教徒は、海陸兩路より支那に來り、布教又は譯經に其身を委ねて、大に佛教の傳播を圖れり。
- (2) 東晋以來、支那の各君主は、概ね佛法に歸依して、之を民間に流布するに盡力せり。
- (3) 佛教の流行すると共に、支那の僧侶も亦多く印度に往きて佛典を將來し、益佛教の發達を促せり。就中法顯は皇紀千五十九年(東晋の末)印度に往き、錫崙より南洋を経て支那

唐世支那の佛僧

法顯、義淨

三台、華嚴、法顯、義淨

に歸り、其間十二年を費し、玄奘は皇紀千二百八十九年(唐太宗)印度に向ひ、百餘國を歴遊し、其間十七年を経たり。尋で義淨は皇紀千三百卅一年(唐の高宗の世)南洋より印度に航し、廿五年の後歸國せり。
曩に百濟は佛法を東晋より傳へ、(千四百)尋で之を我國に傳へしが、(千二百)我國と唐との交通頻繁を加ふるに従ひ、我國の佛教も亦隆盛を極めたり。

第十七章 唐の中世

高宗の位に即くや、太宗の宮女武氏を納れ、遂に立て、皇后となせしが、晩年多疾の故を以て、國政を武後に委ねし

武后大權を握る

則天武后

より、大權其手に歸し、高宗の死（千三百四）後、其後嗣を廢して自から皇帝の位に即き、國號を周と改む。所謂則天武后是なり。然れども内行修らずして朝政大に紊れしかば、張柬之は武后を強迫し、高宗の子、中宗を位に即かしめて唐室を復興せり。千三百六已にして皇后韋氏中宗を弑して、自から政權を握りしかば、中宗の從子隆基は韋氏を誅し、父睿宗を迎へて位に即かしめ、尋で其禪を受く。千三百七之を玄宗となす。

平節度使

高宗以來内亂相繼ぎ、唐の國勢の衰へたるに乗じ、大食、回紇、吐蕃等屢邊境を擾し、かば、玄宗位に即くに及んで、國境の要地に左の十節度使（河西の時より置けり）をおき、兵

馬の大權を委ねて四方を經畧せしめしより、唐の國威復塞外に張れり。

5	4	3	2	1	節度使
河西	朔方	河東	范陽	平盧	所在地
(涼州府省)	(甘肅府省)	(太原府省)	(北平府省)	(內蒙、土默特)	防禦方面
回紇及吐蕃	回紇	契丹	靺鞨諸部		節度使
10	9	8	7	6	所在地
嶺南	劍南	北庭	安西	隴右	防禦方面
(廣州府省)	(成都府省)	(天山北路)	(天山南路)	(甘肅府省)	
南海諸國	吐蕃及南詔	西域諸國	吐蕃		

道教の由來

玄宗又文學を獎勵し、道教を尊崇す。道教は東漢三國の際、佛教興隆の影響を受けて、支那に起源せし一種の宗教に

唐の武帝
周の武帝
武帝諸外
教を抑壓す

武帝諸外
教を抑壓す

武帝

して、老子を以て其祖師となし、其教を傳ふる者を道士といふ。唐の興るや、其姓の李なるを以て、老子を仰ぎて祖先となし、頗る道教を尊崇せしが、玄宗の時遂に之を唐の正教と定めしより、其流行益盛大となり、玄宗七世の孫、武宗に至り、一時道教以外の諸宗教を嚴禁せしかば、(千五百)唐初傳來の諸外教は、概ね衰滅に歸せり。
已にして玄宗在位日久しく、漸く宴樂を好み、國政や、亂る。安祿山^{キムツク}之を機とし、帝の貴妃楊氏に結んで、頻に帝の信任を得、初め平盧の節度使となり、尋で范陽、河東の二節度使を兼ね、其兵力を負うて、遂に反を謀り、河北を陥れ、洛陽をとり、更に長安を犯す。(千四百)玄宗は蜀に出奔し、太子は

安祿山の
反亂

史思明母
唐ノ亂ルヲ
シテ

唐ノ亂ルヲ
シテ
史思明母
唐ノ亂ルヲ
シテ

回紇部の
極盛

靈武(甘肅省)に遁れて帝位に即く。之を肅宗となす。安祿山も亦帝を洛陽に稱せしが、幾ならずして子安慶緒に殺され、内亂起りしかば、官軍之に乗じ、回紇等の援兵を得て、屢賊軍を破ぶり、肅宗の子代宗の時、始めて反亂を平定するを得たり。(千四年)
唐は安祿山の亂後、國威全く萎微し、之に乗じて回紇、吐蕃、南詔の諸國、頻年邊境を侵畧せり。
(第一回紇との關係) 薛延陀部滅亡の後、回紇部は全く外蒙古一帯の地を占領し、殊に斐羅其可汗となるに及んで、(千四年)大に領土を擴め、國威益強盛なりしが、斐羅の子葛勒可汗の時、安祿山の亂を救うて功ありければ、肅宗は其

黠戛斯部の興起

皇女を之に妻はせ、且厚く歳幣を遣りしより、回紇の國風漸く奢侈、遊惰となる。之に乗じて吐蕃は其南を攻め、仙娥河附近の黠戛斯部も亦其北を侵し、かば、回紇部遂に分崩し、其餘衆天山南路に走り、若くは河西に遁れ、黠戛斯部代りて其地を占領せり。(千五百年)

吐蕃大に唐を侵畧す

第二吐蕃との關係 棄宗弄贊に唐と和してより、西邊久しく無事なりしが、高宗の時、吐蕃復吐谷渾の地に侵入せしより、(千三百年)唐との和議破ぶれ、吐蕃は頻に天山南路及青海の地を畧せしが、安祿山の亂後は更に河西隴西を奪ひ、時に或は唐都長安を陥れたり。(千四百年)已にして雲南の南詔部王同いふ大理叛きて唐に通ぜしより、吐蕃の國力漸く衰へ、遂

吐蕃の衰微

に和を唐に請ひ、和盟の碑を國都邏娑（千四百年）に建てたり。

第三南詔との關係 唐初雲南の蠻族六部に分かれしが、

南詔部詔は蠻語王の義なり。故に南詔とは南王と云。詔はんが如し。六部の最南に在るを以てなり。最も

強く、遂に他の五部を一統し、(千三百年)安祿山の亂後は、吐

蕃に従うて屢、四川に侵入せり。已にして吐蕃の專横を怨

んで背き去り、反つて其地を攻畧せり。酋龍南詔王となる

に及んで、(千五百年)國を大理と號し、唐の安南都護府を陥れ、

其領土一時交趾より東印度に跨りしが、酋龍の死後國勢

漸く振はず、遂に和を唐に請へり。(千七百年)

大理國安南を陥る

第十八章 唐の衰滅

節度使の跋扈

孫憲

河北の三鎮

玄宗の時邊要の地に節度使をおきしが、安祿山の亂後内地久しく安からず、邊陲も亦屢、回紇、吐蕃の侵入を被りしかば、節度使は次第に増加し、遂に遍く天下に布くに至れり。節度使はもと其管内に於ける兵、政の兩全權を掌握せしが故に、其勢威日に強く、漸く世襲の姿をなして朝廷の命令を奉せず。就中其專横を極めしは河北の三鎮なり。安祿山の反亂平定するや、代宗は無事を冀ひ、賊の降將三人を擧げて、張忠志成德直隸省魏博直隸省盧龍直隸省三鎮の節度使となし、千三百が、千四年幾ならずして三鎮相結託して兵

代宗の由來

を募り、城を固くし、遂に賦税を納めず。代宗制する能はず。順宗代宗の子德宗は賢臣李泌、陸贄等に任じ、德宗の孫憲宗は名將武元衡、裴度を用ゐて、一時三鎮を制服せしことありしも、憲宗尋で代宗の爲に弒する所となりしより、千四年三鎮を始め、諸方の藩鎮復朝廷に離叛せり。藩鎮外に離叛すると共に、宦者は内に跋扈して、益々唐室の衰頹を促せり。曩に玄宗宴樂に耽りしより、宦者漸く勢を得、尋で肅宗、代宗の時、内亂、外寇多く、宦者常に其左右に侍して君主の信任を得、次第に機務に預りしより、權勢頓に重く、遂に外將、内相は勿論、天子の廢立も亦全く其手に歸するに至れり。

朱全忠宦
者を獵く

唐の滅亡

憲宗の後七十年の間に、帝位を踐みし者凡そ八人、皆宦者
の擁立する所なり。憲宗の曾孫昭宗位に即くに及んで(千
九百四十)英氣あり。汴(河南省)の節度使朱全忠を招きて、悉く
宦者を誅戮せり。(千五百六)然れども朱全忠是より權勢を
専らにし、帝を弑して遂に唐を篡ふ。(千五百六)之を後梁の
太祖となす。唐は天下を保つこと二百九十年にして亡べ
り。望、唐、晋、漢、周、各、後、唐、各、附、之、下、
宦者權を内に弄して以來、諸方の節度使は殆ど獨立の姿
をなまゝしが、朱全忠唐を篡ふに及んで、彼等も亦王を一
方に稱せり。就中其強大なる者左の如し。

王	名	都	城	王	名	都	城
---	---	---	---	---	---	---	---

群雄の割
據

西		北		南			
蜀王	岐王	晋王	燕王	南漢王	楚王	閩王	吳越王
王建	李茂貞	李克用	劉守光	劉儼	馬殷	王審知	錢鏐
成	鳳	晋	幽	儼	潭	建	鏐
都	翔	陽	州	州	州	州	州
<small>(四川省)</small>	<small>(陝西省)</small>	<small>(山西省)</small>	<small>(北今京)</small>	<small>(廣東省)</small>	<small>(湖南省)</small>	<small>(福建省)</small>	<small>(浙江省)</small>

彼等は後梁の太祖と相攻争して、支那内地は方に紛擾を
極め、加之塞外の吐蕃、回紇等、已に皆衰微せしかば、契丹は
此機に乗じて、東亞の一大強國となれり。

第三編 近古期 蒙古人種最盛時代

(千五百六十七年乃至二千七百七十六年)

第一章 契丹の興隆及五代の紛亂

契丹は滿州人種の一派にして、南北朝の頃より、潢河(内蒙古の西側)附近を根據地として、支那に歸服せしが、唐の衰ふるや、漸く内蒙古東部一帯の地を占領して、遂に獨立の姿をなせり。其國もと八部に分かれ、各大人を戴き、八部の大人は三年毎に交代して全八部を統領せしが、耶律阿保機契丹を統領するに及び、(千五百六十七年)諸部の大人を殺し、交代の制を廢して皇帝を稱せり。(千五百七十六年)之を契丹の太祖となす。

耶律阿保機契丹を統一して皇帝を稱す

潢河
西側
内蒙古の東部

契丹の太祖四隣を征す

粟末靺鞨部と黑水靺鞨部と

渤海國の興亡

太祖已に國內を一統しければ、斯に四隣の征伐に従ひ、先づ西に向ひ黠戛斯部と回紇部とを撃破して、蒙古西部一帯の地を畧し、又青海附近に吐谷渾、黨項の諸部を降し、遂に東に還りて渤海國を撃つ。

滿州人種の一派に靺鞨部あり。東晋の頃より滿州地方に散在して數十部に分かれ、就中黑水、粟末の二部尤も強し。黑水靺鞨部は黑水(黑龙江)附近を、粟末靺鞨部は其南粟末水(松花江)附近を占領せしが、太祚榮、粟末靺鞨の部長となるに及んで、始めて國號を建て、渤海といふ。(千三百七十二年)爾後國勢日に強く、黑水以下の諸靺鞨部を服して、隱然東方の一強國たりしが、契丹の太祖は其國都忽汗城(吉林省寧古塔附近)を陷

れて之を滅ぼせり。(千五百八十六年)太祖死し子太宗嗣ぐ。是時契丹の領土東は日本海より西は天山の麓に達せしかば、今や南下して支那内地を侵畧せんことを圖れり。

後梁の太祖朱全忠已に唐を篡うて、帝位に大梁(即ち汴、今河南省開封)に即き、燕王劉守光と連和して、頻に晋を侵し、が李

克用の子李存勗(キョク)勇畧に富み、先づ燕を降し、尋で後梁を滅ぼして帝位に洛陽に即く。(千五百八十八年)之を後唐の莊宗とな

す。莊宗又岐を降し、蜀を併せ、一時殆ど江北を統一するの勢ありしが、是より意滿ちて宴樂に耽りしかば、將士離叛

し、王族李嗣源を擁して位に即かしむ。之を明宗となす。(千五百八十八年)孟知祥なる者、此内亂に乗じ、復成都に據りて後蜀

後梁亡び後唐興る

王と稱せり。
明宗の養子李從珂立つに及んで、河東の鎮將石敬瑭を忌み、之を殺さんとせしが、石敬瑭は契丹の太宗の後援を請ひ、後唐を滅ぼして帝位に即く。之を後晋の高祖となす。(千五百九十六年)高祖は支那北邊の十六州を割きて契丹に謝し、且諸事之が臣下の禮を執りしが、高祖の從子出帝の時、屢禮を契丹に失ひしかば、太宗は大舉南下して後晋を滅ぼし、大梁に據りて國を遼と號せり。(千六百七年)然れども漢人服せず。叛亂四方に起りければ、太宗は守兵を留めて、一旦國都臨潢(西喇木倫の上流)に還りしが、途にして死せり。

石敬瑭は契丹に謝し、且諸事之が臣下の禮を執りしが、高祖の從子出帝の時、屢禮を契丹に失ひしかば、太宗は大舉南下して後晋を滅ぼし、大梁に據りて國を遼と號せり。(千六百七年)然れども漢人服せず。叛亂四方に起りければ、太宗は守兵を留めて、一旦國都臨潢(西喇木倫の上流)に還りしが、途にして死せり。

後唐亡び後晋興る

遼の太宗の北歸するや、後晋の故將劉知遠は其守兵を擁

契丹の太宗後晋を滅ぼす

後漢と後周と

うて、帝位に大梁に即く。之を後漢の高祖といふ。其子隱帝の時に至り、鄴の鎮將郭威反し、遂に帝位を篡ふ。之を後周の太祖といふ。(千六百年)是に於て隱帝の叔父劉崇は太原に據りて、北漢國を建て、援を遼に乞ひ、頻に恢復を圖りしが、反つて太祖の養子世宗の爲に撃破せられたり。世宗此勢に乗じて江南の經畧に従ふ。

唐の末年楊行密は、今の江蘇、安徽、江西の地を占領して吳王と稱せしが、已にして其部將李昇反き、吳を滅ぼして南唐國を金陵(江蘇省江寧府)に建て、(千七百九年)其子李璟の時、更に南閩を滅ぼし、西楚を併せて、勢威江南を傾けしが、是に至りて世宗の破ぶる所となり、悉く江北の地を割きて和を請

後周の世宗の勇畧

五代

へり。(千六百年)世宗北に還りて遼の征伐に従ひしが、中途にして死し、嗣子尙ほ幼なりしかば、將士等趙匡胤を擁立して帝位に即かしむ。之を宋の太祖といふ。(千六百年)唐の滅亡より是に至るまで五十餘年、其間中原を占領せしもの、後梁、後唐、後晉、後漢、後周の五國あり。故に史家之を五代といふ。宋後周に代るに及んで、四方の列國前後討滅せられ、天下復一統に歸せり。

第二章 宋の一統

唐末以來、節度使は其藩鎮に於ける兵政の二大權を握りしが、五代の時、天子は概ね其部下の將士の擁立に係り、從

宋の太祖
節度使の
權威を削
奪す

宋の太祖
の經略北
南を先に
す

うて其威嚴重からざれば、節度使は益跋扈を極めたり。宋の太祖は、此宿弊を一掃せんが爲に、左の方法を行へり。
(第一)宿將功臣に諭して節度使をやめしめ、新に文臣を以て之を補欠せしかば、節度使の兵權漸く弱し。
(第二)從來節度使の配下なりし州郡は、更めて朝廷に直隸せしめしかば、節度使は次第に民治の權を失へり。
(第三)朝廷より新に轉運使を各地方におきて、其地方の租税を管理せしめしかば、節度使は全く財政の權を失ふ。
太祖已に民治、兵馬、財政の三大權を朝廷に收めて、國內の革新を終へたれば、斯に列國の征伐に従ふ。當時列國の宋に服せざる者、北に北漢ありしも、遼の後援ありて、一朝に

宋天下を
一統す

太宗荆越
を伐つ

征服し難ければ、姑く之を措きて南に向ひ、先づ荆南を降す。(千六百年)荆南は五代の初め、高季興の建國に係り、湖北の一部を占領せしが、是に至りて亡ぶ。太祖更に後蜀を併せ、(千六百年)尋で南漢、南唐を滅ぼし、が、弟太宗其後を承け、吳越を降し、又北漢を滅ぼして、遂に天下を一統せり。(千六百年)宋の太宗已に支那本部を一統し、又國境を擴めんことを圖りしかば、南北兩方面に於て交趾及遼との關係起れり。

(第一)交趾との關係 交趾は唐の安南都護府の所在地なりしを以て、又安南の名あり。秦漢以來常に支那に隸屬せしが、五代の時、南漢の衰滅するや、丁部領なる者其地に獨

立して國號を瞿越と稱す。(千六百年)已にして其國內亂ありしかば、太宗は之に乗じて南伐の師を起し、(千六百年)炎熱の爲め功なくして還り、交趾は是より全然一外國となり。

契丹ハ耶律休哥

太祖 太宗 聖宗 聖祖 遼州の役

契丹ノ王ヤクニ起ス (第二)遼との關係 太宗の北漢を滅ぼすや、勢に乗じて遼を侵し、遼ノ地ヲ侵スが、遼將耶律休哥大に宋軍を高梁河(今ノ北)に破れり。爾後廿餘年間、宋、遼二國の好全く絶え、河北の地は常に交戦の區となる。太宗は一時高麗と連和して、遼の夾撃を志し、遼ノ地ヲ侵スも成功せず。太宗死し、子眞宗嗣ぐに及んで、(千五十七年)遼は大舉して宋を侵す。眞宗之を澶州(直隸省大名府)に破ぶりしが、其入寇頻年なるを恐れ、遂に歲幣銀十一万兩、絹廿

万匹を遼に贈りて和を結べり。(千六百年)

第三章 遼の極盛及西夏の興起

遼は太宗の後、五傳して、其從曾孫聖宗位に即く。(千六百四年)

賢明にして英畧あり。已に南宋と和し、更に東高麗を伐つ。

曩に新羅は一時朝鮮を統一せしが、唐末に至り、國威の振はざるに乗じて群雄四方に起り、王建なる者松嶽(京畿道開城府)

に據りて國を高麗と號し、遂に群雄を平定し、新羅に代りて朝鮮を一統せり。(千五百九年)之を高麗の太祖となす。遼と宋との争起るに及んで、高麗は常に宋と通ぜしを以て、聖

新羅の滅亡と高麗の興起

て宋の邊境暫く事なきを得たり。

第四章 宋の制度改革

宋は唐末五代に於ける藩鎮の跋扈に懲り、建國以來其宿弊を除くに急にして、遂に之が爲に其國力を弱くし、太宗先づ交趾に失敗し、眞宗次に遼に失敗し、仁宗も亦西夏に失敗せり。仁宗の後二傳して、神宗位に即くに及んで、(英字 神宗)年若くして氣鋭なりければ、此屈辱を濯がんと欲し、王安石を登庸して、富國強兵の策を講ぜしむ。王安石主として左の新法を行ふ。

宋の大屈

神宗王安石を登庸す

王安石の富國策と強兵策と

新法

- (富國策)
 - (1) 青苗法 播苗の時期に、朝廷より資金を百姓に貸與し、秋熟の時期に、二割若くは三割の利子を添へて還附せしむ。
 - (2) 募役法 人民に相當の免税を納めしめて、服役の義務をとき、朝廷は別に無職の民を募りて役に充つ。
 - (3) 市易法 京師に市易務なる官省をおき、市場に賣れざる商品を購買し、若くは官物と交換し、又商人に資金を貸附し、規定の利子を納めしむ。
- (強兵策)
 - (1) 保甲法 一種の民兵制度にして、十家を保とし、五百家を都保とし、都保に正副長二人をおき、部下の保丁をして武藝を講習せしむ。
 - (2) 保馬法 保丁に官馬を貸與し、其死病する時は、相當の辨償をなさしむ。

神宗已に王安石を擧げて、内に富國強兵の策を建てたれば、今や外國の經畧に従ひ、斯に復西夏及交趾との關係起れり。

(第二)交趾との關係 是より先き交趾には、瞿越チウコウ既に亡び、

宋大越を伐つ

豪族李公蘊なる者大越國を興し、(七十六年)神宗は當時大越が其隣國占城(今の交趾支那)真臘(今の暹羅)との交戦に疲弊せるを機とし、占城真臘と同盟して之を撃破せし(千七百卅六年)宋軍の死亡せし者も亦過半にして、遂に國威を南方に張る能はず。

王韶の西方經畧

(第二)西夏との關係 仁宗の後、宋の西夏と事なきこと廿年に餘りしが、神宗位に即くに及んで、宋軍西夏を襲ひしより、兩國の和親破れ、神宗は王韶をやり、吐蕃諸部を征服して、西夏の外援を絶たしめしも、兵士の死亡多くして、成功なきのみならず、反つて西夏の爲に大敗せしかば、遂に復和を媾せり。(千七百四十三年)

神宗の外國經畧の失敗

初め神宗西夏を滅ぼし、交趾を降たし、而して後力を遼に專にして、北邊を恢復せんと志し、が、皆意の如くならず、りしのみならず、遼は宋の西夏と難あるを機とし、反つて其北邊を侵畧せり。かくて神宗の政策は外國經畧に於て全く失敗し、加之國內に於ける黨争の基を開けり。元來王安石の新法は、國庫の充實を目的とせしが故に、人民一般に之を悦ばず、殊に當時の名臣司馬光等は、其祖宗の制に違ふを非難して之に反對し、遂に朝廷に新法、舊法の兩黨派を生じて、相軋轢するに至れり。

新舊法兩黨の軋轢

神宗死し、(千七百四十五年)子哲宗、徽宗相嗣ぎて立つ。此間兩黨政の權を争奪するもの十六年に餘りしが、徽宗位に即き、奢侈

徽宗蔡京
を用ゐて
新法を行
ふ

にして土木を好み、國用給せざるに及んで、新法黨の酋領
蔡京を擧げ、新法を復して國庫を充實せしむ。(千七百六)舊
法黨是に於て全く敗れたり。

宋女眞と
遼を夾撃
せん

蔡京は邊功を建て、其信任を厚くせんと欲し、童貫をや
り、吐蕃を伐ちて河湟(黄河と湟水の間)の地を取り、又西夏を畧せ
しむ。童貫是より權勢を得、遂に女眞部と連合して、遼を夾
撃するの策を説く。徽宗是に於て使を發し、海路より女眞
に通ぜしむ。(千七百八十年)

第五章 女眞の興隆

女眞は即ち黒水靺鞨部なり。もと渤海に歸服せしが、遼の

生女眞部
と熟女眞
部と

生女眞部
の阿骨打
遂に反く

渤海を滅ぼすに當りて、混同江(今の松花江)附近の女眞は、遼に

臣服して熟女眞部といひ、其東按出虎(今の阿楚喀)水附近の女

眞は、唯其羈縻を受け、之を生女眞部(鳥羽)といふ。阿骨打生女眞

の部長となるに及んで、(千七百七)遼の衰微せるに乘し、兵

を擧げて屢遼兵を破ぶり、遂に國を金と號し、皇帝を稱す

(千七百七)之を金の太祖となす。

時に興宗の曾孫、天祚帝遼に君たりしが、淫虐にして國政
を顧みず。金反するに及んで、親征して混同江に至りしが、

金の太祖は逆撃して之を破ぶり、熟女眞部を降だし、遼の
東京を陥れて上京に逼る。是時宋使金に來りて、遼を夾撃

宋と金の同盟

せんことを約す。其條件左の如し。

(第一)金は北より遼の中京を攻むると同時に、宋は南より遼の南京を取りて之を夾撃すべし。

(第二)成功の日は、後晋の時、遼に與へし支那本部の地は宋に歸し、自餘の遼地は悉く金の有となす。

(第三)宋は從來遼に與へし歳幣を金に贈るべし。

是に於て太祖は遼の上京、中京を降たし、天祚帝を追うて又西京を陷る。遼の王族に耶律大石あり。餘衆を率ゐて西中央亞細亞に遁がれ、天祚帝は西夏に依らんとせしが、西夏反つて藩を金に稱せしかば、途にして金軍の獲る所となる。遼は建國より二百十年にして亡べり。(千七百八十五年)

遼の滅亡

金の太宗宋を侵す

是より先き宋將童貫は約に従ひ、遼の南京を攻めて抜く能はざる間に、金軍南下して之を占領せしかば、宋は既定の歳幣の外、毎歳代税錢百万緡を贈るを約し、僅に南京と其附近の六州とを得たり。(千七百八十二年)然れども金も河北を併呑するの志ありければ、太祖の弟太宗繼ぐに及んで、(千七百八十三年)粘没喝、幹離不等をして、大舉して燕京(遼の南京)を陷れ、直に宋の國都汴京に逼らしむ。

金汴京を陥れて宋の二帝を擒す

宋の徽宗大に驚き、急に己を罪するの詔を下し、位を其子欽宗に傳ふ。欽宗は金に金廿万兩、銀四百万兩を與へ、且中山(直隸省定州)、太原(山西省太原府)、河間(直隸省河間府)の三鎮の地を割くを約して、其撤兵を請へり。己にして宋は約に背きて三鎮の地

張邦

宋の南渡

を與へざりしかば、金軍復南下して遂に汴京を陥れ、欽宗
 徽宗及其皇妃、皇族を執へて北に還る（千七百八）是に於て
 河東、河北の全土は悉く金の有に歸せり。
 金軍北に去るに及んで、欽宗の弟康王構は位に應天（河南省歸德府）
 に即く。之を高宗となす。高宗即位の初め、名將李綱を任用して、
 銳意恢復を志し、が幾ならずして之を罷め、寵臣黃潛善
 の言に従ひ、金を避けて都を南、揚州（江蘇省揚州府）に移せり。（千七百八）
 之を宋の南渡といふ。宋一たび南してより、河南、關中、
 江淮の地、相繼きて金の有に歸し、遂に恢復の望なきに至
 れり。

第六章 金宋の攻戰

宗澤兵ヲ
 オコシ汴京ヲ
 回復シ却テ
 カサニソビシ
 モリマケテ
 テニカク宗澤
 ヲ殺シテス

西夏金と
 同盟して
 宋を侵す

金の太宗は、宋の南渡を機とし、粘沒喝、兀朮等をして南伐
 せしむ。金軍復汴京を陥れ、長驅して揚州に至る。高宗は難
 を杭州より温州（浙江省温州府）に避けしかば、河南、江淮の地は皆
 金に没せり。加之宋の南渡してより、西夏は宋に背き、金と
 同盟して南、關中の地を畧せり。已にして太宗疾篤く、金軍
 引き還りしを以て、高宗も亦杭州に還りて、都を斯に奠め
 たり。（千七百九）
 曩に高宗の生母韋氏は、徽宗と共に擒となり、移されて遼
 東に在り。高宗日夜之を召還せんことを念ひ、南渡以來連

撻懶と秦
檜と

劉豫ヲ齊
王トシテ軍
也

報廟

孔子也、
韓海、
子飛

秦檜和議
を唱ふ

に使を金にやり、臣と稱して兵を罷めんことを請ひしが、
太宗死し、從孫熙宗立つに及んで、(千七百九十五年)太宗の從弟撻
懶國政を執り、始めて其請に應じ、慙懃を敵國に示して、自
己の勢力を増進せんと欲し、宋人秦檜なる者、囚はれて金
軍に在るを放ち還して、兩國の和議を講せしむ。
金軍の北に還りてより、宋軍連に邊境を恢復せしが、秦檜
宋に來歸し、高宗に登庸せられて、相となるに及んで、嚴に
其進軍を禁じ、使を金に遣りて和を請はしむ。時に金の熙
宗は、撻懶の宋と通じて國を危くするの異志あるを疑ひ、
之を誅戮して復南伐の軍を起す。宋將韓世忠、岳飛等逆擊
して之を破り、將に河北を恢復するの勢ありしが、秦檜尙

ほ和議を持し、使を金にやりて兵を罷めんことを乞ふ。金
も亦前敗に懲りて之に應じ、遂に左の條件を締結せり。(千
七百一

(第一)東は淮水、西は大散關(陝西省鳳翔府寶雞縣)を以て、兩國の境界
となす。

(第二)宋より歲貢銀絹各廿五万を納むべし。

(第三)宋の君主は金の封冊を受くべし。

(第四)徽宗の梓宮及章太后を宋に送歸すべし。

兩國の媾和已に成りしも、宋の學者、軍人等多く之を悦は
ず。宋の學者は、一方にては漢、唐の學者の古典の註疏のみ
に齷齪たりし反動として、一方にては南北朝以來流行せ

宋の學風

大和の兵にナリ身死シテシテ折ラセリ
大和キコウツセワアラセリ
一四八

秦檜學者
を抑へて
文字の獄
を起す

し佛教の影響として、文字の訓詁をすて、經傳の義理を
攻究するを尙べり。仁宗の時、周敦頤(濂溪先生)、胡瑗(安定先生)ありて
其氣運を啓き、尋て神宗の時、程顥(明道先生)、程頤(伊川先生)の輩出で
て、所謂宋學(ウエニシテ)の一派を開き、學藝よりも較る實行を重んず
るの傾向を作りければ、彼等は皆君父の仇なる金と和す
べからざるを主張せり。秦檜是に於て文字の獄を起こし、
一言一句嫌忌に渉る者は、必ず之を貶竄して學者の口を
塞ぎ、又岳飛、韓世忠等の兵權を奪りて、専ら反對黨を抑制
せしかば、是より敢て戰を言ふ者なし。

金の熙宗晚年暴虐なりしかば、從弟廸古乃之を弑して位
を篡ひ、舊都會寧府(按出虎水源に在り)の僻幽なるを厭ひ、都を燕京

廸古乃の
遷都及南
侵

金宋の
和

に移して之を中都となし、大に宮殿を修めて華麗を盡し、
(千八百)年尋で六十万の大軍を起して南に下り、江南を併吞
せんと志し、(千八百)年國人離叛し、其從弟烏祿を擁して
帝位に即かしむ。之を世宗となす。世宗南伐の兵をやめ、宋
に和議を求む。是時孝宗、高宗の禪を受けて宋に君たり。金
の内亂を機とし、銳意恢復を謀りしも、其成功の難きを知
りて、遂に金の請に應じ、從來の君臣の關係をやめ、新に叔
姪の關係となし、且從來の歲貢、銀帛各廿五万を、歲幣各廿
万に減ずるを約して和を結べり。(千八百)年
遷都以來、金の國風漸く奢侈、文弱に流る。世宗之を憂ひ、國
人の漢姓を冒し、又漢服を著くるを禁じ、且一般の經史を

金の世宗
國風を保守す

女眞文字に譯出し、力めて其國風を保守せしむ。實に金の中興の英主なりしが、世宗死し(千八百四十九年)孫章宗嗣ぐに及んで、嬖臣事を用ひ、國勢漸く傾けり。

韓侂胄と朱熹と

是時宋の孝宗も亦位を子光宗に傳へしが、光宗父皇に禮なかりしかば、群臣國人服せず。韓侂胄遂に光宗を廢して、子寧宗を擁立せしが、是より其功を貢うて國政を擅にし、朱熹(晦菴先生)の己に近ふを含みて之を貶黜せり(千八百五十四年)朱熹は當時の大儒にして、程顥、程頤の學を祖述し、盛に致知、養性の説を唱へ、其門弟天下に遍かりしかば、其貶黜せらるゝに及んで、天下囂然として朝政を非とす。韓侂胄怒り、朱熹の門流を偽學徒となし、其官途の就職と、其著書の公

韓侂胄金を侵す

布などを嚴禁せり(千八百五十六年)然れども朱熹の學説は天下に歓迎せられ、爾來今日に至るまで、儒學の正流となれり。韓侂胄已に宋の内政を擅にし、又外征を起して威嚴を建てんと欲し、金の國勢振はざるを機として、北伐の軍を起し、(千八百五十六年)反つて大敗せしかば、寧宗遂に韓侂胄を斬りて金に謝し、且歳幣銀帛各十萬を増し、別に犒師銀三百萬兩を贈りて和議を結べり(千八百五十八年)然れども是時蒙古の勢已に強く、幾ならずして金、宋相繼ぎて其併吞する所となれり。

宋和金に請ふ

第七章 蒙古の興起

蒙古部長
鐵木眞

蒙古部は唐代より幹難、怯魯連二河の水源なる不而罕山（今の肯特山の支脈必兒喀嶺）附近の地に蕃息し、世々遼金に羈屬せしが、鐵木眞其部長となるに及んで、（千八百五十四年頃）頻に近傍の諸部を併せ、勢漸く強大となる。

蒙古の興
起時代の
於ける塞
外の形勢

當時蒙古部の東隣には、興安嶺に接して塔々兒部あり。其北貝加爾湖畔に沿うて泰赤烏部あり。其南は沙漠を阻て、長城に接して汪古部あり。其西薛靈格河の流域には蔑里吉部あり。蔑里吉部の南には克烈部あり。更に其西按臺（今阿爾泰山附近）には乃滿部あり。乃滿部の南、天山の附近には畏吾兒（故の回紇部）あり。又貝加爾湖の西岸には幹亦刺部あり。其西也里的石河の流域に吉利吉思（故の彘斯）部散居せり。

乃滿部の
太陽罕

鐵木眞内
外蒙古の
諸部を一
統して成
吉思汗と
稱す

鐵木眞先づ蔑里吉部を破り、泰赤烏部を降だし、尋で克烈部を滅ぼし、汪古部を招致し、蒙古の勢日に強大を加へしかば、乃滿の部長太陽罕は、幹亦刺、塔々兒の諸部と連合して鐵木眞を襲ひしも、鐵木眞之を杭海（今之杭愛）山に逆撃して太陽罕を斃せり。（千八百六十四年）太陽罕の子屈出律は、餘衆を也里的石河上に會して恢復を圖りしも、復敗れて西遼に奔れり。是に於て塔々兒部以下、前後蒙古部に降り、内外蒙古の地全く鐵木眞に歸しければ、遂に大汗の位に即き、成吉思汗（強盛なる君主の義）と號せり。（千八百六十六年）時に年正に五十二才なり。

成吉思汗已に塞外を一統しければ、兵を南して先づ西夏

成吉思汗
西夏を降
すし金を侵

蒙古軍西
遼に向ふ

西征
の
途程
を示す
地図

を降たし、(千八百六)尋で金を侵す。時に金の章宗已に死して内亂あり。成吉思汗之に乗じて直に中都燕京に逼る。章宗の庶兄宣宗位に即き、和を蒙古に請ひ、都を南汴京に遷せり。(千八百七)是に於て黄河以北の地は概ね蒙古に歸し、金は唯北は黄河により、西は潼關によりて其侵畧を防禦するのみ。

曩に西遼に遁れし乃滿の屈出律は、遂に西遼の王位を篡ひ、蒙古の南伐を機として其虚を構はんことを圖る。成吉思汗之を聞き、部將哲別をやり、之を撃破せしむ。これ實に蒙古西征の導火にして、葱嶺以西は爲に空前の一大變動を見るに至れり。

第八章 蒙古の西征

曩に摩訶末によりて建設せられたる大食國の領土は、葱嶺以西の亞細亞全土より、亞非利加及歐洲の一部に跨り、文運も亦旺盛を極め、國都八吉打は一時世界の文化通商の中心となりしが、皇紀千四百年代の末より、哈利發の威嚴次第に衰へ、所在の豪族は算端(君王)と稱し、哈利發の代理者として、其地方に於ける兵馬政治の大權を握り、隱然獨立の姿をなし、哈利發は唯宗教上の虚位を充すに至れり。

西突厥が一時中央亞細亞を領せし故、突厥人種の大食國內に住する者多く、哈利發及算端等は、其武勇を愛して之

大食の哈
利發實權
を失ふ

西征の途程
を示す
地図

突厥人種
大食國內
に跋扈す

哥疾寧家
の興亡

セルヂ
ク一家の
盛衰

耶律大石
セルヂ
ク一家を
破りて西
遼國を立

乃滿の屈
出律西遼
を滅ぼす

を軍隊に用ゐしより、次第に權勢を得しが、皇紀千六百五十年の頃、マームードなる者、突厥人種より起りて哥疾寧^{アフガニスタン地方}に據り、北は阿母河より南は波斯灣に至れる^{アフガニスタン地方の南}領土を開き、更に印度に侵入し、^{アフガニスタン地方の南}千六百六十年^{アフガニスタン地方の南}ラヂャプト種族の連合軍を撃破して、印度河及恒河の流域を占領せしが、マームード死して、^{アフガニスタン地方の南}千六百九十年^{アフガニスタン地方の南}哥疾寧家の勢威衰へ、遂にセルヂク家の撃破する所となれり、^{アフガニスタン地方の南}千七百九年^{アフガニスタン地方の南}セルヂク家の始祖をセルヂクといふ。亦突厥人種に屬し、不花刺附近に居りしか、孫トグルルに至り、哥疾寧家を破りて其領土を奪ひ、トグルルの子アルブアルスラン、孫メリク、シャー等、頻に東羅馬帝國を破りて地を西に擴

め、國運隆盛を極めしが、メリク、シャーの死に莅みて、^{アフガニスタン地方の南}千七百十二年^{アフガニスタン地方の南}其領土を諸子及功臣に分割せしより、セルヂク家の勢威漸く傾けり。時正に遼の王族耶律大石は、天山南路の畏吾兒部を征服して中央亞細亞に入り、セルヂク家を破りて阿母河以北の地を奪ひ、遂に國を西遼一に哈喇契丹^{黒契丹}と號し、都を吹河上の虎思斡耳朵に奠め、^{アフガニスタン地方の南}千七百十六年^{アフガニスタン地方の南}花刺子摸國、吉利吉思部等を羈縻して、一時中央亞細亞に雄視せしか、其孫直魯克の時、乃滿の屈出律蒙古に逐はれて來奔し、幾ならずして花刺子摸王と通じ、直魯克を襲うて西遼を篡へり、^{アフガニスタン地方の南}千八百七年^{アフガニスタン地方の南}曩^{アフガニスタン地方の南}メリク、シャーの領土を分つや、部將ヌシニテギンは

花刺子摸の興起

屈出律の敗死

花刺子摸王黙時の家を滅ぼす

花刺子摸王の興起

二五八

花刺子摸王となりしが、其の孫テキシニハセルザユク家の耶律大石に敗られしに乘じ、之れを滅して波斯を一統し、哈利發を擁して西方亞細亞に號令せり。テキシニの子黙時嗣ぎ、(六十八年)屈出律に應じ、西遼を滅ぼして、西爾河以南の地を畧し、自餘の西遼の領土は悉く屈出律に附與せしが、哲別の軍至るに及んで、屈出律は敗死し、(千八百七)其地悉く蒙古に歸し、蒙古は直に花刺子摸と境を接するに至れり。

哥疾寧家の衰微するや、阿富汗人シヤハブ、ウツチンなる者ゴール(の東南)に據り、(千八百)哥疾寧家に代りて、阿富汗斯坦及北、西、中三印度を領せしが、シヤハブ、ウツチン死

印度の奴隸王家

黙時の窟死

し、ゴール家の振はざるに乘じ、黙時は全く阿富汗斯坦を併吞せり。(千八百七)ゴール家の滅亡と共に、シヤハブ、ウツチンの部將クタブ、ウツチンは、中印度のデルヒに據り、賓都耶山北の全土を占領せり。彼はもとゴール家の奴隸なりしが故に、之を奴隸王家といふ。

花刺子摸王黙時既に西遼を滅ぼし、又ゴール家を斃してより、意滿ち氣驕り、屢蒙古の商民、使人を殺戮せしかば、成吉思汗大に怒り、自から大軍に將とし、四子朮赤、察合台、窩濶台、拖雷と共に、花刺子摸に侵入し、(千八百七)國都尋思干(今之撒馬兒罕)を陥る。黙時は僅に身を以て免れしも、蒙古の將速不台、哲別に追迫せられて、遂に裏海島中に竄死せり。(千八百)

一五九

札蘭丁印
度に遁る

年
八十八百
八十四

十) 默特の子札蘭丁は、哥疾寧に據りて恢復を圖りしが、亦大敗し、印度に遁れて奴隸王家に依る。是に於て花刺子摸の地悉く平定しければ、成吉思汗遂に東に還れり。(八十八百

速不台、哲別の二將は、曩に默特を追うて裏海に至り、更に

太和嶺(高加)を踰えて、突厥人種の一派なる、欽察部に侵入

す。欽察部は阿羅思(亞露西)の諸侯と連合し、之を阿里吉河畔

に逆へて大敗せり。(千八百八十四年) 會成吉思汗東歸の報あり

しかば、蒙古軍は大に阿羅思の東南部を掠奪して去れり。

第九章 金の滅亡

蒙古西夏
を滅ぼす

成吉思汗東に歸るや、西夏の曩に蒙古に降りしも、其反覆常なきを責めて之を滅ぼせり。(千八百八十七年) 李元昊より凡そ百九十年にして、西夏亡ぶ。成吉思汗は更に金を侵さんとせしが、六盤山(甘肅省平涼府固原州)に至りて死せり。(千八百八十七年) 之を太祖となす。

タシリ
の組織

窩濶台の
即位

蒙古の法、大汗となる者は必ず諸王、諸將及蒙古附屬の諸國の君主等を以て組織せる、クリルタイと稱する大會の推戴を経るを要せしが、是に於て太祖の第三子窩濶台推されて蒙古の大汗となる。即ち太宗なり。太宗始めて都を哈喇和林(外蒙古の斡)に奠め、(千八百八十九年) 又父の遺志を紹ぎ、弟拖雷と共に汴京を陥る。時に金の宣宗の子、哀宗位に在り

蒙古宋と通じて金を滅ぼす

蒙古と宋と交戦の原因

蒙古と高麗との關係

しが、蔡州(河南省汝寧府)に奔りて宋の援を乞ふ。

宋は金の蒙古に敗れし以來、既に歲幣を絶ちしが、是に至り反つて蒙古に通し、軍を合せて蔡州を陥る。(千八百九十四年)金は帝を稱すること百廿年にして亡べり。宋は此機に乗じて中原を恢復せんと欲し、急に兵を發して汴京、洛陽に入り、蒙古の守兵を逐ひしかば、兩國の和親破ぶれ、蒙古の軍直に南下して、宋の邊境日に蹙れり。

蒙古の金を破るや、遼の遺族等、遼東に據りて國を大遼と號し、高麗に侵入す。會、蒙古の軍來りて大遼を滅ぼし、しかば、(千八百七十八年)高麗は幸に侵略を免れ、是より蒙古に服従せしが、已にして反覆常なかりしかば、蒙古の軍復侵入して

援都の西征

ニッソの戦

國都開城(即ち松嶽)を陥れ、高麗は遂に降を乞へり。(千九百一年)

金亡び、高麗敗れ、東方稍事なきに及んで、太宗は更に西方を經畧せんと欲し、朮赤の子拔都に命じ、其兄斡耳朵、太宗の子貴由、拖雷の子蒙哥等と共に阿羅思を征伐せしむ。(千八百九十一年)蒙古の軍直に阿羅思に入り、北に向うて烈野登を屠り、モスカウを陥れ、更に南に下りて幾富を取り、遂に歐洲の内地に逼り、一軍は馬札兒(今牙利)を、一軍は孛烈兒(今波蘭)を蹂躪して、將に捏迷思(今獨逸)を攻掠せんとせしかば、歐洲北部の諸侯王等連合して、之をリীগニツに逆撃せしも、反つて大敗せり。(千九百一年)會太宗の訃音到りしを以て蒙古軍東に還れり。

蒙古大汗
國分裂の
遠因

太宗死し、子貴由歐洲より歸り、クリルタイに推されて大
汗となる。(五年九百)之を定宗となす。在位三年にして死し、太
宗の一族は、太宗の孫失烈門を擁立せんと謀りしが、拖雷
の子蒙哥反つてクリルタイに推されて、大汗の位に即き、
憲宗となりしかば、太宗の子孫皆平ならず。此の如くして
太宗の子孫と拖雷の子孫とは、永く怨敵となり、遂に蒙古
大汗國分裂の遠因を醸せり。

第十章 宋の滅亡

忽必烈の
南方經營

憲宗位に即き、皇弟忽必烈をして南方を經營せしむ。忽必
烈四川より雲南に入りて大理國を降し、(十三年九百)更に吐蕃
に入る。吐蕃の始祖棄宗弄贊以來、歷代佛法を崇奉せしが、

喇嘛教の
由來

喇嘛教の
善、紅、
教、
教、
教、

北印度の一僧巴特瑪撒巴々なる者吐蕃に來り、其國俗に
適應せる一種の密教喇嘛教(喇嘛とは無上の義を唱ふるに及んで、七年四百)其教盛に傳播し、從うて喇嘛の勢威遂に
國王を凌ぐに至れり。忽必烈の吐蕃に入るや、先づ喇嘛を
招致し、後喇嘛拔思巴を帝師に拜して、吐蕃全土を統領せ
しめたり。忽必烈更に部將兀良合台をやり、交趾を征せし
む。時に大越國の李氏既に亡び、陳煗なる者代りて交趾に
王たりしが、是に至りて蒙古に降れり。(十八年九百)

交趾蒙古
に降る

旭烈兀の
西征

太祖の東歸以來、花刺子摸の殘黨及中央亞細亞の回教徒
等徃々叛亂を企て、西方漸く不穩なりしかば、憲宗は皇弟
旭烈兀をやり、之を平定せしむ。(十四年九百)旭烈兀先づ木刺夷

八吉打の
哈利發の
滅亡

部を伐つ。木刺夷部は當時裏海の南岸に蟠踞せし、暗殺派
と稱する回教徒にして、兇悍獍猛久しく蒙古の累をなせ
しが、旭烈兀之を滅ぼし、更に八吉打に逼りて哈利發モス
タシムを降す。(千九百年)モスタシムの一族密昔兒(今埃及)に遁
れて、哈利發を稱せしかば、旭烈兀は部將をして印度の奴
隸王家を侵畧せしめ、自から大軍を率ゐて西に進み、將に
密昔兒の回教徒を殲さんと志ししが、會、憲宗の訃音到り
て、西征の軍を收む。

憲宗忽必
烈と宋を
侵す

大理吐蕃交趾已に蒙古に降りしかば、憲宗は皇弟阿里不
哥をして喀喇和林を留守せしめ、自から大軍に將とし、忽
必烈と力を併せて宋を侵ししが、中途にして死せり。(千九百

宋の賈似
道忽必烈
と和す

年八)時に理宗寧宗に繼ぎて宋に君たり、賈似道をやり蒙古
を防がしむ。賈似道鄂州(湖北省武昌府)に至り、密使を忽必烈に遣
り、臣と稱し幣を納めて和せんことを請ふ。忽必烈方に阿
里不哥が喀喇和林に據りて、蒙古の大汗を稱せんとする
と聞き、遂に江北の地と、歲幣銀絹各二十万を納むるを命
じて和を賈似道に許し、匆々軍を北に還し、開平(内蒙古多倫諾爾の

忽必烈と
阿里不哥

蒙古國號
を建てし
元といふ

北)に至り、部下の諸將の勸進により、正當なるクリルタイ
を待たずして蒙古の大汗となる。之を世祖といふ。(千九百
尋で自から將として阿里不哥を降し、新に都を燕京に奠
めて之を大都となし、又國號を建てし、元といふ。(千九百然
れども從來憲宗の一族に怨ある定宗の一族は、世祖の即

位が、蒙古の慣習に違背せるを口實として臣禮を執らず、
此の如くして蒙古分裂の基漸く成立せり。

蒙古の南
侵と宋の
滅亡と

曩に賈似道の蒙古と和して還るや、深く臣と稱し幣を納
むることを匿くし、世祖の使者來りて前約を促す者を囚
へしかば、世祖大に怒り、伯顔をして大舉南伐せしむ。時に
理宗の從孫恭宗位に在り。賈似道を黜け、文天祥等の勤王
の兵を徵して防戦せしが、國都杭州遂に陥り、(千九百)宋は
建國より三百十六年にして斯に滅亡す。宋の遺族等崖山
(廣東州府)に據りて恢復を圖りしも、幾ならずして元軍の
破ぶる所となれり。

第十一章 元初の外征

世祖東南
方諸國を
經略す

從來蒙古の外國經畧は、主として西北の方面に限りしが
故に、世祖は専ら兵を東南に用ゐ、宋を滅ぼして後は更に
我國、高麗、交趾、占城、緬及南洋侵畧の軍を起せり。

高麗と元
との關係

(第一)我國及高麗との關係 太祖の時一旦高麗を降服せ
しも、其後反覆常なかりしが、世祖の時高麗の内亂を鎮定
し、太祖十世の孫なる元宗を擁立し、(千九百)尋で元宗の子
忠烈王に其皇女を妻はせしより、高麗は全く蒙古の外藩
となれり。

元我國に
入寇して
大敗す

世祖已に高麗を服してより、其王を介して屢、我國を招致
せしも、我國は唐末以來久しく支那と國際上の交通を絶
ちしと、且蒙古の書辭の無禮なりしとを以て之を退け、其

伊人えヲロ
るいふを
ハナ
北戎
唐を
歴る

使者を斬りしかば、世祖怒り我壹岐對馬に入寇して成功せず。(千九百四年)更に阿刺罕、范文虎を將とし、高麗の兵を併せ、戰艦四千五百艘、我九州を侵し、が颶風の爲に復大敗して還れり。(千九百四年)世祖報讐を志し、も南方の經畧に暇なくして、其事遂にやみたり。

元の世祖
緬國を降
す

(第二)緬國との關係 緬は今の緬甸なり。蒙古曩に大理國を降して雲南の地を定むるや、其西南境は直に緬國に接せしかば、世祖屢使をやり、其朝貢を促し、も命に應ぜず。蒙古の軍來りて、國都蒲甘を陥るに及んで、緬王遂に歲貢を約して降を乞へり。(千九百四年)

(第三)交趾及占城との關係 世祖の曩に交趾を降すや、又

元の脱歡
交趾を征
す

其南隣國なる占城を招致せしも、命に應ぜざりしかば、皇子脱歡をして途を交趾に借り、占城を伐たしむ。(千九百四年)時に陳嬰の孫陳吟交趾に王たりしが、元の要求を拒む。脱歡先づ交趾を征し、一旦國都交都(今河内)を陥れしも、軍中疫作りて成功せず。已にして陳吟其罪を謝して元に入貢し、(千九百六年)占城、眞臘も亦尋で來降せり。

(第四)南洋諸國との關係 世祖は占城、交趾を征討すると同時に、又使者を發して、南洋諸國を招致せしむ。是に於て馬八兒(南印度)、蘇木都刺以下の諸國皆元に入貢せしが、獨り瓜哇命を聽ざりかば、元軍來りて之を擊破せり。(千九百三年)是より元の國威南洋に遍ねし。

元の國威
南洋に遍
ねし

蒙古の極盛

第十二章

元の極盛

世祖ノ汗土成ル
是れハ蒙古ノ極盛也

元初に於ける蒙古の版圖

蒙古の四汗國

鐵木眞が蒙古の大汗となりしより、僅々八十年の間に於て、蒙古は實に空前絶後の一大帝國を建設せり。世祖時代に於ける蒙古の領土は、西伯利亞の北部と印度の南部とを除き、亞細亞大陸を横貫して歐洲に跨り、而して蒙古の諸王は、此大帝國內に皆幾分の私領を有せしが、就中左の四部尤も大なり。

(第一) 伊兒汗國 旭烈兀の子孫の封地にして、西方亞細亞一帯を領し、マラグア(「ウルミア」湖の東)を國都とす。

(第二) 欽察汗國 伊兒汗國の北に位し、東は吉利吉思荒原

より、西は歐洲の匈牙利の國境に至る、拔都の子孫斯に君臨し、或は之を金黨汗國といふ。亦的勒(今の「カ」)河下流の薩萊を國都とす。

(第三) 察合台汗國 察合台の子孫斯に君臨し、西遼の故土を領し、阿力麻里(伊犁曲城附近)を國都とす。

(第四) 窩濶台汗國 窩濶台の子孫の封地にして、乃滿の故土に當り、也迷里(「エミル」河附近)を國都とす。

世祖は元の皇帝として、遼東内外蒙古、支那本部、圖伯特及中央亞細亞を直領するのみならず、又蒙古の大汗として、此等の四汗國を統御せざるべからず。故に彼は此大帝國を管理せんか爲に、阿母河行省を建て、葱嶺以西を統べ、

世祖の屬地管轄法

蒙古時代に於ける東西の交通頻繁となりし二大原因

海陸兩路の交通

阿力麻里アリマ元帥府を建て、天山北路を統べ、別失八里ベシハリ（今の杭）
府元帥府をおきて天山南路を統べ、嶺北行省をおきて杭
海山ガイサン以北を統べ、遼陽行省を建て、滿州及朝鮮を統べ、安
南行省を建て、南海諸國を統べしむ。

空前絶後の一大帝國現出して、所在に割據せし幾多の小
國滅亡せしが故に、商賈の往來自由となりしと、且又此大
帝國內には、政治上及軍事上の目的を以て、新に官道を開
き、宿驛を設け、守備隊を配置せしが故に、大に旅客の危険
困難を減少せしと、此二大原因よりして、東西兩洋の交通
は其面目を一新し、西方亞細亞及歐洲の商人は、遠く其販
路を喀喇和林、燕京に開き、而して波斯、印度と支那との海

二元帥府行省（西夏）

一七四

西方の文化と東方の文化と

上の交通も亦頓に頻繁を加へ、江南なる泉州、福州の諸港
は、當時世界第一の貿易場となり、外國人の其地に來住す
る者幾万を以て數ふべし。かの以太利のマルコ・ポーロ、及
亞非利加のイブン・ハッター等が、支那に遠遊を試みしは、
實に元時代にして、我日本の國名の西方に知られしも亦
此時代に屬す。加之蒙古の大汗殊に元の世祖は、人種の異
同を問はず、才能ある者を登庸せしが故に、阿刺比亞波斯
の學者、軍人、以太利、佛蘭西の畫家、職工等の來りて、其朝に
仕ふる者頗る多く、此の如くして西方の天文、數學、砲術等
は、支那に輸入せられ、支那の羅針盤、活版術等は西方に將
來せられたり。

蒙古と耶蘇教國との關係

世祖の時
初めて耶蘇教の會堂を建つ

東西の交通頻繁を加ふるに従ひ、耶蘇教徒の東方に布教する者亦漸く多し。彼等は方に十字軍の再興に熱中せしが故に、蒙古と同盟して回教徒を撲滅せんと欲し、己に羅馬法王インノセント四世は、使僧柏朗嘉賓を定宗の王庭に遣り、(千九百五年)尋て佛蘭王ルイ九世も亦使僧羅柏魯をして、憲宗を喀喇和林に訪はしめたり。(千九百十三年)蒙古は建國以來の方針として、一般に宗教の自由を許さしが、殊に回教國を併呑せんには、歐洲の耶蘇教徒と親和するの必要を知りしが故に、一般に之を厚遇し、世祖の時初めて其教會を燕京に建設するを許せり。(千九百五十四年)爾來幾多の耶蘇教徒支那に來りしが、元亡びて東西の交通や

むと共に耶蘇教も亦次第に廢絶に歸せり。

第十三章 元の衰微

初め憲宗蒙古の大汗となりしより、太宗の子孫たる窩濶台汗國の諸王は、常に不平を抱きしが、世祖の位に即くや彼等は皆之を否認し、就中太宗の孫海都は、世祖が宋との攻争に暇なきを機とし、窩濶台汗國の諸王を誘うて反旗を翻せり。(千九百廿五年)

世祖は察合台の曾孫八刺を察合台汗に命じて、海都を抑へしむ。八刺反つて海都に與し、相與に大汗の直領地たる中央亞細亞を畧し、更に世祖の親弟旭烈兀の封地たる伊

八刺と海都との同盟

海都汗の反亂

兒汗國を侵し、ハニシハクが(千九百)旭烈兀の子阿八哈アハハの爲に敗ら
れて軍を還せり。

欽察汗と
伊兒汗と
の關係

欽察汗の始祖拔都バドの後、二傳して其弟別兒哥ベエカに至る。熱心
なる回教徒にして、伊兒汗旭烈兀が八吉打ハチキチを陥れ、哈利發ハリフ
を擒にせしを怨み、埃及の回教徒と呼應して、屢、伊兒汗國
に侵入し、爾後此兩汗國長く怨敵となりしかば、拔都の孫

海都汗蒙
古の大汗
となる

忙哥帖木兒マカテモエ、別兒哥ベエカに繼ぐに及んで、亦海都に與し、海都は
欽察、窩濶台、察合台三汗國の諸王の推戴によりて、新に蒙
古の大汗となり、(千九百)遂に入刺の子都哇トワと兵を併せて、
頻年喀喇和林に逼る。太祖の諸弟撻只タジ、鐵木哥テモカ等の子孫の、
滿州地方に王たる者も亦之に應ぜり。(千九百四)世祖は伯

滿州の諸
王海都に
應ず

顔をして海都を撃退せしめ、自から將として滿州地方を
平定せり。

都哇と察
八兒と

世祖死し(千九百五)孫成宗セウシウ嗣ぐに及んで、海都尙ほ屢邊に
入寇せしが、幾ならずして死し、(千九百六)子察八兒サハエ窩濶台
汗となり、察合台汗都哇トワと共に元に降れり。(千九百六)己に
して察八兒復異志を抱きしかば、都哇は元の援兵を乞う
て之を撃破し、(千九百六)遂に窩濶台汗國を滅ぼして其地
を併吞せしより、西北邊始めて事なきを得たり。

窩濶台汗
國の滅亡

海都亂を起してより、斯に四十餘年、元は連年の戰爭に疲
弊せしかば、世祖の時既に阿合馬特アハハマテ、(波斯)盧世榮等ロセイを登庸
して國庫の充實を圖らしむ。彼等は交鈔カウチウ即ち紙幣を濫發

世祖或庫
を充實す
るを圖る

元成宗の海國
の貨物
の騰貴と

蒙古の相續法

し、或は外國貿易を官業となし、或は鹽鐵、酤酒の税を増して一時の急を救ひしも、徒に元室滅亡の遠因を醸成しに過ぎず。加之蒙古の相續法は、必しも父子の世襲を認めざるが故に、帝位繼承の際に多少の紛争を起し、従うて權臣其擁立の功を負うて威福を專にし、此の如くにして元は次第に衰微せり。
成宗死し、(千九百六十七年)從子武宗嗣く。武宗位を弟仁宗に傳ふ。仁宗は武宗の子、和世辣を立て、皇嗣となさんとせしが、鐵木迭兒讒して之を黜け、位を實子碩德八剌に傳へしむ。之を英宗となす。和世辣は察合台汗國に遁がれ、其援兵を得て頻年元に入寇せり。

鐵木迭兒
と燕帖木
見と

鐵木迭兒は其擁立の功を負ひ驕暴なりしかば、英宗漸く之を疎外せしに、鐵木迭兒の黨與は帝を弑し、其從子泰定帝を立つ。(千九百八十年)泰定帝の後、子天順帝嗣ぎしが、燕帖木兒之を廢し、和世辣の弟文宗を擁立して其信任を得、文宗の子順宗の時、其女を納れて皇后となし、天下の大權を擅にせり。

第十四章 明の興隆

元は國初より交鈔を濫發せしかば、順帝の時に至りては其價下落して全く通用をなさず。従うて物價は騰貴して人民の困苦甚しく、加之曩に吐蕃を征服してより、之を撫

交鈔の濫發と物價の騰貴と

元代に於ける喇嘛の尊崇

御せんが爲に喇嘛を尊崇し、世祖初めて喇嘛拔思巴を帝師に拜せし以來、歴代の帝王、皇妃皆帝師に就きて佛戒を受け、佛事供養の費貲られず。順帝の時に至りて其極に達し、國庫益缺乏して、國民の負担日に重く、方に物價の騰貴に苦める國民は、此厚歛に堪へずして皆亂を懷ふ。殊に順帝即位以來、淫樂を事として國政を顧みず。元室の威嚴全く地に墜ちしかば、蒙古の羈絆を快とせざる漢人等、遂に四方に紛起せり。

群雄の蜂起

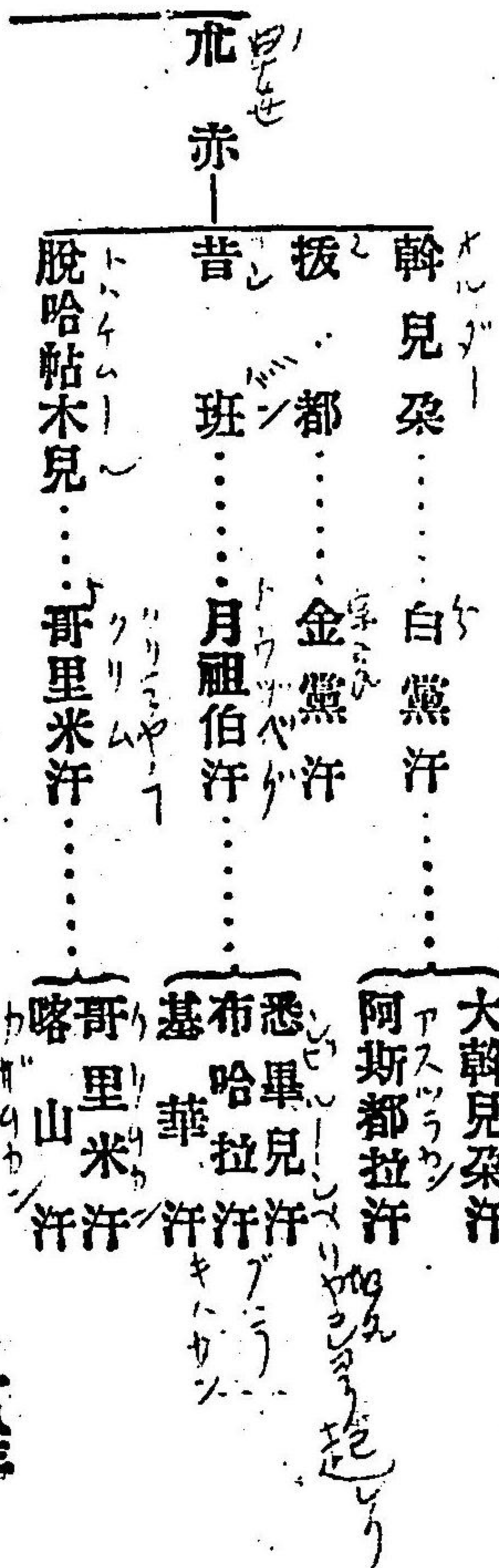
朱元璋の武功

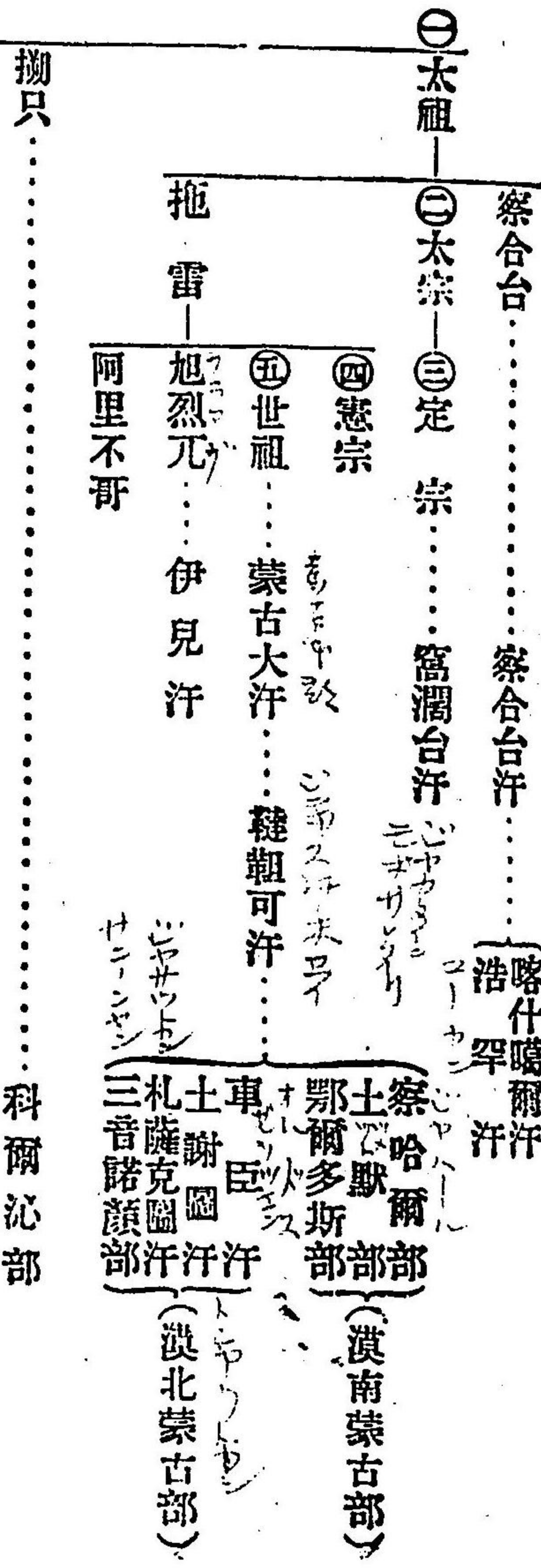
張士誠は江蘇に據り、陳友諒は湖北、湖南、江西を畧し。方國珍は浙江の地を占む。朱元璋も兵を濠州(安徽省鳳陽府)に擧げて、遂に金陵(江蘇省江寧府)に據りしが、(二十年五月)兵勢日に強く、陳友諒

元の滅亡

張士誠、方國珍等を討滅して、江の南北一帯の地を併せ、尋で部將徐達、常遇春をして元を伐たしむ。徐達等到る所元軍を摧破して、直に大都に逼りしかば、順帝は防戦に暇なく、遂に開平に奔れり。世祖國號を建て、より九十八年にして元亡び、(二十年八月)朱元璋帝位に即く。之を明の太祖(洪武帝)となす。

蒙古帝王諸汗畧系(本文に關係なき者は一切省略す)





撻只
 鐵木哥
 科爾沁部

明軍脱古
 思帖木兒
 を破りて
 漠南を平
 定す

明の太祖更に常遇春をやり、順帝を開平に撃つ。順帝は應昌(開平)に遁れて遂に其地に死し、子脱古思帖木兒餘衆を率ゐて、大汗を喀喇和林に稱し、遼東を侵畧せんとなし。が、明將藍玉大軍に將として之を捕魚兒湖畔に襲ひしかば、脱古思帖木兒大敗して喀喇和林に退き、途土拉河畔に

太祖又西
 南蠻を征
 服す

至りて、反者の手に死せり。(二十八年)是に於て蒙古の部族全く潰散し、漠南、滿州の地は皆明の版圖に歸せり。太祖は同時に又兵を四川、貴州、雲南の方面に用ひ、元の遺族若くば群雄の其地に割據する者を平定し、更に大理、金齒(大理に住せし部族、金を以て齒を飾るが故に此名あり)等雲南の西部の諸蠻部を招降せり(二十一年)

太祖の内
 外に對す
 る政策

太祖已に南北を平定せしより、外は遼東(盛京省)大寧(内喀喇沁)大同(山西省)開平、甘州(甘肅省)貴州(貴陽府)洮州(甘肅省)等邊要の地に、行都指揮使司をおきて國防を嚴にし、内は元末の諸弊を革め、租税を軽くし、又宋の郡縣制度を用ゐて、帝室孤立せしに懲り、諸皇子を要地に分封して、帝室の

藩屏となし、が其邊陲の諸王には特に征伐の自由を附
與せしを以て、漸く尾大の勢をきたし、太祖の死後幾なら
ずして、内亂を醸す醸すに至れり。

燕王の反

太祖死し、(二十八年)孫惠帝(建文)嗣ぎ、諸王の強大を恐れ、漸く
之を抑壓せしかば、諸王皆安せず。燕王棣は惠帝の叔父な
り。燕京に據り、北邊を鎮して、夙に重望ありしが、惠帝の諸
王と相善からざるを機として、反旗を擧げ、大軍を率ゐて
南下す。

燕王の篡

曩に太祖は惠帝の年若くして、功臣を制馭し能はざるを
慮り、多く宿將を誅戮せしかば、燕王南下するに及んで、朝
廷の諸將よく之を防ぐ者なく、殊に金陵の宦者等燕王に

成祖交趾
を平定す

内通しければ、城遂に陥り、惠帝出奔して、往く所を知らず。
燕王代りて帝位に即く。之を成祖(永樂)となす。(二十六年)都を
燕京に移して、北京となし、舊都金陵を南京となす。

成祖雄志あり。交趾に内亂あるに乗じて之を滅ぼせり。交
趾王陳吟曩に元に歸服せしが、其後國威漸く振はず。明初
に至りて民心殆ど陳氏に離叛せるに乗じ、黎季犛(暹)なる者
王位を篡ひ、國を大虞と號し、(二十六年)使を明に遣りて其封
冊を求む。成祖は陳氏の遺族を助け、大虞を征して、黎季犛
を擒にし、(二十六年)其地に交趾布政司を開きて之を統治せ
しかば、占城、老撾の諸國も亦相尋で明に内附せり。然れど
も明は故の陳氏の後を立てざりしかば、國人服せず。黎利

明復交趾
を棄つ

鄭和の遠

明威南洋
に振ふ

なる者之に乗じて亂を作し、國を大越と號し、(二十八年七)屢明軍を破れり。成祖の孫宣宗(宣德帝)の時遂に交趾を棄て、(二十年九)黎利を安南王に封じて和を結べり。曩に成祖の位を篡ふや、惠帝の海外に逃亡せしを疑ひ、宦者鄭和に命し、海軍を率ゐて南海諸國を歴訪せしめ、服せざる者あらば輒ち之を征せしむ。明が安南を併せ、國威の南海に加はるに従ひ、琉求、真臘、暹羅、滿刺加、渤泥、蘇門答刺、瓜哇、榜葛刺等の卅餘國皆明に來貢し、明人も亦多く南海諸國に通商せり。

第十五章 蒙古諸汗國の盛衰

蒙古諸汗
國衰微の
大原因

元の東方に滅亡すると共に、察合台、伊兒、欽察の三汗國も亦西方に衰微せり。蒙古の諸汗國が爾く衰微せし大原因は、主として其王位相續法の不完全に在り。蓋し蒙古の慣習として、有力にして年長なる者を擁して、汗位を占めしむるは、游牧人種にとりて頗る適當なるへしと雖ども、已に一帝國を建設せし後は、早晚篡奪の紛擾を免れさればなり。

察合台汗
國の衰微

都哇の後、子也先不花、察合台汗となり、父祖の怨敵たる伊兒汗國に侵入せしが、(七十九年百)反つて伊兒汗鄂勒哲圖の爲に大敗して還り、察合台汗國の勢威是より振はず。加之其後嗣者も亦概ね暴君にして、政治上及宗教上の反亂相繼